

「高校の科目の在り方」、 「内容の一層の構造化」について



1. 外国語を学ぶ意義

- ・ AI時代に外国語を学ぶ意義の再定義と、外国語の「見方・考え方」の見直し

2. 目標・内容の一層の構造化

- ・ 「学びに向かう力・人間性等」の整理等を踏まえた目標の示し方
- ・ 「高次の資質・能力」（「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」）を中心とした内容の一層の構造化

3. 発信力強化

（1）グローバル・多文化共生社会の担い手の育成 （外国語で他者とコミュニケーションを図る意欲等の育成）

- ・ 英語を学ぶ動機付けや児童生徒の目標設定の在り方
- ・ 動機付けを強化するための話題・活動の在り方

（2）英語の使い手の育成（英語運用能力の育成）

- ・ 校種間接続の課題等を踏まえた指導内容（話題・活動等）の段階的な示し方
- ・ 5領域の活動を通した知識及び技能の指導の在り方（語彙や文法の指導を含む）
- ・ 科学的知見を踏まえた学習プロセスを意識した指導の在り方
- ・ 高等学校の科目（特に「論理・表現」）の在り方
- ・ AIを含むデジタル学習基盤の活用の在り方

4. 児童生徒の英語力の把握・評価

- ・ 「学びに向かう力・人間性等」の評価の新しい整理を踏まえた評価等の在り方

5. 柔軟な教育課程

- ・ 義務教育における調整授業時数制度や高校における科目の柔軟な組み替えや履修の免除を可能とする仕組みを前提とした場合に、考えられる教育課程・学習指導の工夫の在り方

6. 指導体制・環境整備等

- ・ AI時代の教師・ALT等の役割の再定義
- ・ 教員の資質（英語力・授業力）向上のための方策と、ALT等との連携の在り方
- ・ 外国語を使う機会の充実の在り方

7. 英語運用能力に関する社会全体の課題

- ・ 英語運用能力に関する社会全体の課題と、学校教育において取りうる対応の方向性

8. 英語以外の外国語

- ・ 英語以外の外国語の推進方策

学習指導要領の目標・内容の構造化・表形式化イメージと具体化が必要な論点

目標

●●する資質・能力（資質・能力の趣旨）について、●●することなどを通して（学習過程）、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
--------	--------------	--------------

見方・考え方

●●（当該教科で扱う事象や対象）を●●（当該教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着眼して捉え）、●●（当該教科固有の考え方や判断の仕方）すること。

内容

	●学年相当	●学年相当	●学年相当
知識及び技能に関する統合的な理解 ・~~~~ ・~~~~ ・~~~~	・~~~~ ・~~~~ ・~~~~	・~~~~ ・~~~~ ・~~~~	・~~~~ ・~~~~ ・~~~~
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 ・~~~~ ・~~~~ ・~~~~	・~~~~ ・~~~~ ・~~~~	・~~~~ ・~~~~ ・~~~~	・~~~~ ・~~~~ ・~~~~
（内容の取扱）			

目標、「本質的意義」を踏まえた見方・考え方

➡ 「本質的意義」の再整理も含め、第3回までの議論を踏まえた案を暫定としつつ、今後の内容の等を踏まえて見直していく予定

（スライド●～●参照）

※小・中の英語の目標、高校の科目目標の在り方も別途検討

内容 ※個別の内容を選択・精選しながら議論

- 「本質的意義」の再整理、見方・考え方、目標を踏まえた話題・活動・教材等の充実の方向性
- 小・中学校の指導内容（話題・活動等）の段階的な示し方 ➡ 12/1(第4回)で議論

- 高校の科目の在り方
- 内容の一層の構造化①
 - 表形式化の具体的な形式
 - 高次の資質・能力の在り方（小・中）

➡ 本日議論

- 内容の一層の構造化②
※高校の高次の資質・能力の在り方を含む
- ➡ 年内を目途に議論

（その他の重要事項）

- 5領域の活動を通じた知識及び技能の指導の在り方
- 語彙の在り方
- ➡ 上記の後に議論



1. 高校の科目の在り方

【現状と課題】

高等学校・外国語に関する現状と課題

（前回改訂における科目設定）

- 前回改訂では5領域を総合的に扱うことを一層重視する必修修科目として「英コミュⅠ」を設定し、更なる総合的な英語力の向上を図るための選択科目として「英コミュⅡ」及び「英コミュⅢ」を設定
- また、「話すこと」及び「書くこと」を中心とした発信力の強化を図るため、特にスピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、まとまりのある文章を書くことなどを扱う選択科目として「論表Ⅰ」～「論表Ⅲ」を設定

（現状と課題）

- 5領域の活動を通じた指導の推進に一定の進捗が見られ、CEFR A2以上の英語力を有する生徒の割合が増加（H25：31.0%→R6：51.6%）
- 一方、R6学習指導要領実施状況調査等によると、「話すこと」及び「書くこと」といった発信の領域において課題が見られる
- 世界的にも外国人留学生数が増加している中、日本の大学等においても留学生総数が過去最多となったことや、企業においても英語でのビジネスコミュニケーションを行える力が求められていることを踏まえると、引き続き高校までの英語教育には総合的な英語力の向上と発信力の強化が求められている
- 総則・評価特別部会では、学習の基盤となる資質・能力の一つである「言語能力」に関し、人間ならではの思考やコミュニケーション等を生み出す基盤となるものと整理されるとともに、「知識・技能及び思考力・判断力・表現力等の一体的育成」等の実現に向けた思考・判断・表現の過程では、言語により「外化※」し、自分なりの意味を構築していくことが不可欠と示されたところ。

※外化：書く・話すなどの活動を通じ、知識の理解や頭の中で思考したことなどを表現すること

【方向性と具体的論点（案）】

科目の在り方

（科目名の見直し）

- 前回改訂で意図した総合的な英語力の向上と発信力の強化は現在も一層の推進が求められていることを踏まえると、英コミュと論表の科目の趣旨は維持すべき
- 英コミュは総合的な英語力の向上を図る趣旨を明示するため、科目名を「英語コミュニケーション（5領域総合）」に見直してはどうか
- 論表は、英語コミュニケーションを中核に「話すこと」及び「書くこと」による「外化」を中心とした発信力の強化を図る趣旨であることを示すため、科目名を「英語コミュニケーション（スピーキング・ライティング）」に見直してはどうか

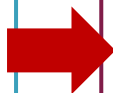
（内容の見直し）

- 併せて、各科目趣旨に沿った指導が行われるよう、内容を見直してはどうか
- また、「知・技」、「思・判・表」のさらなる強化に資するとともに「学びに向かう力・人間性等」を育成する観点から、外国語学習方略を両科目で扱い、「内容」や「内容の取り扱い」において具体的に記載してはどうか
- 新たな英コミュと新たな論表の2科目を併行履修する場合には、新たな英コミュで読んだり聞いたりした話題を論表でも扱ったり、新たな英コミュで扱った言語材料を新たな論表でも活用したりするなど、科目間のカリマネが重要。教師の自助努力のみに委ねずに、カリマネが進むよう、使用する教材間の話題や活動の連携を促進するとともに、学習指導要領において指導上の工夫を促すべきではないか

【現状と課題】

「英語コミュニケーション」(英コミュ)の現状と課題

- 5領域の活動のバランスや5領域を総合的に扱うことに対する意識は浸透しつつある
- 一方、教材の文章には発信に活用するには難しい語彙や文法が含まれている場合がある等により、読んだり聞いたりしたことをもとに、話したり書いたりするといった領域統合が十分に行われていない



【方向性と具体的論点(案)】

「英語コミュニケーション(5領域総合)」(仮称)

- 小中高の最終段階として総合的な英語力の向上を目指す新たな英コミュが、実社会における外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力をより高められるよう、5領域を総合的に扱いつつ、受容と発信の領域統合を一層重視する科目として内容の改善を図ってはどうか
- 「知識及び技能」については、「既習の言語材料の活用」と「新たな言語材料(主に受容に必要なもの)の導入」を基本とするべきではないか
- 新たな英コミュの科目趣旨に沿った指導が行われるよう、教材については以下の方向性で検討すべきではないか
 - ・ 聞いたり読んだりする受容技能の育成を目的とした教材(①)と、読んだことをもとに書いたり話したりする発信に活用できる言語材料で構成された教材(②)という2段階で単元を構成するなど、領域統合が行いやすいように単元構成を工夫できないか
 - ・ 発信に活用できる言語材料で構成された教材(②)については、聞いたり読んだりして、言語材料や表現する内容が徐々に蓄積され、発信での活用につながるような構成にできないか

【現状と課題】

「論理・表現」（論表）の現状と課題

- 5 領域を総合的に育成する英コミュと比べて、授業で活動を通した英語使用の機会が十分に与えられておらず、科目の趣旨に沿った指導が十分行われていない実態がある
- その要因としては、以下が考えられる
 - ・ 英語力の向上のためには、文法事項を網羅的に指導する必要がある、という教師の認識
 - 文法事項を軸にした単元構成の教科書や副教材を活用して、文法解説と問題演習を中心とした授業展開が行われている場合がある
 - 言語使用における正確さを求め、結果として文法項目や語彙の用法の解説が授業の中心となる場合が多い
 - ・ やり取りにおける発話や、生徒が書いた文章などに対して個別のフィードバックを行うことが物理的に困難であったり、負担が大きいため、教師が指導方法に難しさを感じている

【方向性と具体的論点（案）】

「英語コミュニケーション（スピーキング・ライティング）」（仮称）

（１）科目の方向性・目的

- 発信力の強化を目指す観点から、新たな論表は表現等を工夫しながら、幅広い話題について発信できること、流暢性を高めることを重視すべきではないか

（２）知識及び技能の内容と取り扱い

- 文法事項等は、発信領域の活動に必要な項目を扱うという方針を継続してはどうか
- 新たな論表で強化する「知・技」として「論理の構成や展開」の扱いを充実させてはどうか
※活動を通した知・技の指導の在り方については別途議論

（３）活動の充実・体系化

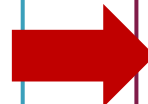
- 主な活動として、現行のスピーチ、プレゼン、ディベート、ディスカッションに加えて、「日常的な会話」を行い、コミュニケーション方略を使いながら会話を継続したり発展させたりする力の育成を扱うこととしてはどうか
- 書くことの活動の充実を図るため、AIによるフィードバックなども有効に活用しながら、プロセスを重視した指導を強化するとともに、オンライン上の「やり取り」等を含め活動のバリエーションを示してはどうか
- 発信力強化のために、総合的な探究の時間等でこれまで学習してきたことや経験してきたことを基に英語で発表する要素を入れてはどうか
- 科目趣旨に沿った指導が行われるよう、教材については言語の働き等を活用する活動を中心とした単元構成、単元配置にするべきではないか
- 生徒の発話や作文への個別のフィードバックの充実、対話等の練習量を増加させる工夫などにおいて、AIを含むデジタル学習基盤の効果的な活用を検討するべきではないか

※AIを含むデジタル学習基盤の効果的な活用の在り方については別途議論

【現状と課題】

中学校と高等学校の接続・連携

- 高校においては多様な地域から様々な生徒が入学することを踏まえ、入学初期の生徒の英語運用能力を適切に把握し、指導の充実を図っていくことが課題
- 中学校における指導事項の定着の観点から、高校において中学校での既習の言語材料の活用を促す必要



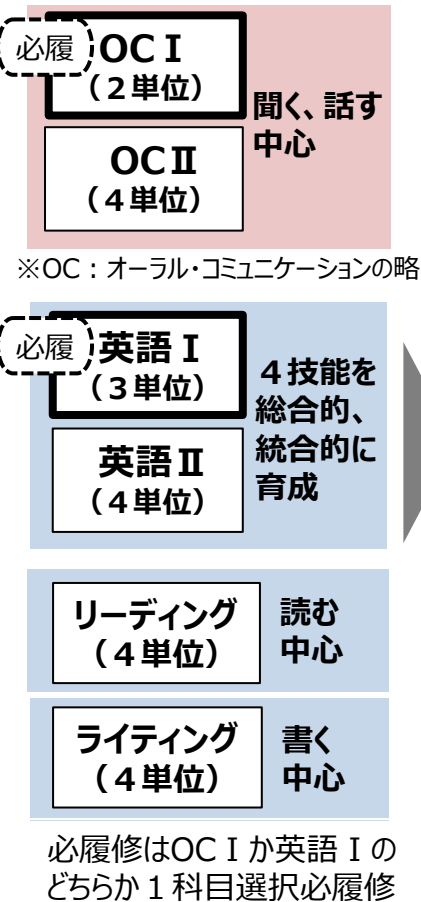
【方向性と具体的論点（案）】

中学校と高等学校の接続・連携

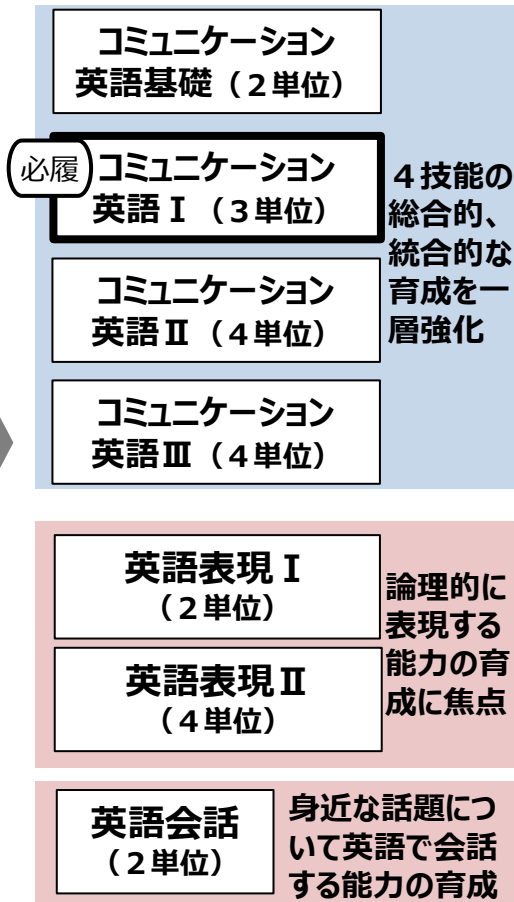
- 入学初期に、授業での活動状況の丁寧な観察やAIを含むデジタル技術の活用等による生徒の英語運用能力や学習状況の適切な把握により、中学校との接続に配慮して指導を行うことを重視すべきではないか
- その際、教師が負担なく実施できるような方策についても併せて検討すべきではないか
- 中学校との話題の継続性に配慮し、高校においても「身近な社会的な話題」を引き続き扱うべきではないか
- 領域別あるいは領域統合の活動において、中学校での既習の言語材料を繰り返し活用しながら、思考力、判断力、表現力を発揮する活動を重視すべきではないか

※専門科目については、上記の方向性を踏まえて必要な改善を行う

平成11年3月告示



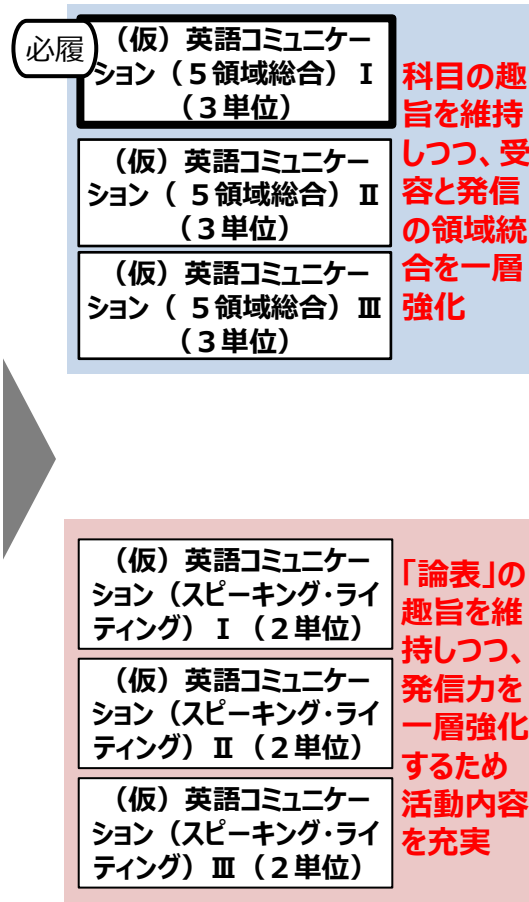
平成21年3月告示



現行 (平成30年3月告示)



改訂の方向性



【専門教科 (英語)】



※上記科目の改善の方向性を踏まえ、必要な改善を行う

(2) 言語能力と情報活用能力との関係性について (補足イメージ①)

- (1) で述べた情報活用能力・言語能力それぞれの資質・能力の全体像については、参考資料②及び③の方向性で各WGで議論が行われているが、現行指導要領の下でも「言語能力だけ」「情報活用能力だけ」に力をいれて研究に取り組む学校が見られるなど、「学習の基盤となる資質・能力」としての一体的理解が進んでいない実態も見られる。
- 言語能力と情報活用能力は、相補的に働くことで効果的に育成・発揮できるものと捉えることができ、その関係性を以下の通り整理することで、学校現場にとって趣旨が伝わりやすく、取り組みやすいものになるのではないか。

【言語能力】

- 言語による情報は、字面が同じであれば誰にでも同じように受信・発信されるわけではなく、人間による認知の過程で初めて意味が形成されるものであり、それを利用して言語による情報の背景にある人間の経験や感情も伝えられる一方、誤解して受け止められることもある。
- このような基本的な認識に立てば、言語能力は、言語を介して「他者」を理解し、知識を得つつ「自分」の考えを形成・表現する能力であり、人間ならではの思考やコミュニケーション等を生み出す基盤となるもの。自他の諸感覚を通じた経験（身体性）に根ざした、意見の形成や対話・合意のために不可欠な資質・能力ともいえる。
- 今後、個別の資質・能力レベルでは生成AIによる代替も可能になることも想定されるからこそ、「知識及び技能に関する統合的な理解」「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮」「知識・技能及び思考力・判断力・表現力等の一体的育成」が重要となるが、それらの実現に向けた学習の過程では言語により「外化」(注) し、自分なりの意味を構築していくことが不可欠。 (参考資料④)

- ※ 今次改訂で進める単元のまとまりごとの授業づくりを助け、「深い学び」の実現に繋げるためにも、言語能力の発揮による「外化」が鍵を握る。

(注) 書く・話すなどの活動を通じ、知識の理解や頭の中で思考したことなどを表現すること

【情報活用能力との関係】

- 言語能力の基礎の上に情報技術を活用すれば、言語と言語以外の情報を組み合わせたり、情報を効果的・効率的に再構築したり、自らの身体では難しい創作などを行ったり、情報を地理的・時間的制約を超えて広く発信したりするなど、人間の思考やコミュニケーション、身体活動等を強化・拡張し、探究的な学びや課題解決に繋げていくことが可能。
- 一方で、情報技術の活用が「外化」をはじめとする言語能力の発揮を促す活動を欠いて行われた場合、身体性に根ざした人間ならではの価値の創造や意味理解を欠いた、空疎な情報の集積・共有となる恐れもある（例：言語による外化なしに生成AIが生成したものをそのまま使うなど）

- ※ 思考・判断・表現の過程で、言語能力を発揮するに当たっても、情報技術を活用して思考やコミュニケーション、身体活動等を強化・拡張することで、より質の高い「外化」が可能となる。

- ※ こうした空疎な情報の集積・共有が、誤情報の拡散やそれによる誤った認識の拡大といった負の側面の顕在化を招いている

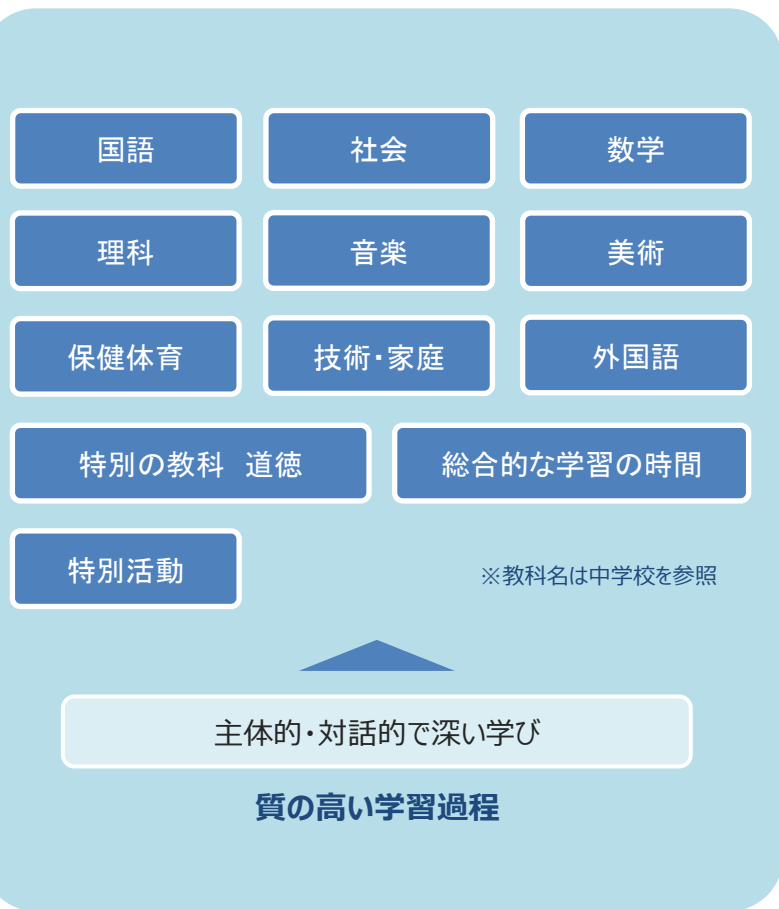
- 以上のような言語能力と情報活用能力のそれぞれの特質や相補的な性質を踏まえながら、いずれも学習の基盤として着実な育成を図ることの重要性を示す事としてはどうか。

「学習の基盤となる資質・能力」の相互の関係等について

補足イメージ①

各教科等において育む資質・能力

元となる学問体系等を踏まえて系統的に内容が組織・配列されていることで、学習内容の体系的な習得を図るとともに、学習内容を相互に結びつけて理解しやすくなるなど、資質・能力の深まりを効果的に実現する。



各教科等の
内容を通じて
育成を図る



日々の学習や
生涯にわたる
学びを基盤とし
て支える

学習の基盤となる資質・能力

個々の教科等に収まらず、日々の学習や生涯にわたる学びを基盤として支える資質・能力は、各教科等の内容を通じて育成を図ることとなる一方、育成する資質・能力の全体像を教科等を超えて整理することで、各学校でのカリキュラム・マネジメントを通じた教育課程全体での体系的な育成を担保する。

言語能力

言語による情報を理解してそれを基に思考し、文章や発話により表現するための力

→言語を介して「他者」を理解し、知識を得つつ「自分」の考えを形成・表現する根幹であり、人間ならではの思考やコミュニケーション等を生み出す基礎となるもの。思考・判断・表現の過程で、自らの諸感覚を通じた経験（身体性）に根差した言語による「外化」を行うことが、生成AI時代にこそ不可欠な「深い学び」の鍵を握る。

思考やコミュニケーション等の強化・拡張

相補的に働く

思考やコミュニケーション等の基礎

情報活用能力

情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていく力

→情報技術を活用して、言語と言語以外の情報を効果的に組み合わせたり、情報を再構築したり、自らの身体では難しい創作などを行ったり、情報を地理的制約を超えて広く発信するなど、人間の思考やコミュニケーション、身体活動等を強化・拡張し、探究的な学びや課題解決に繋がっていくもの。より質の高い、効率的な「外化」を可能とする。

教育課程全体で育む「言語能力」が働くイメージ

令和7年11月28日
国語WG
資料1P18

AIによる大量の言語生成が可能となり、それをSNS等で容易に発信可能な時代だからこそ、
自らの意思や考えの形成・表現や、他者の経験・感情の理解といった人間ならではの言語能力を重視

受信

内容を正確に理解するとともに、発信者の経験・感情・意図を掴みながら、自己の考えを豊かに形成

構造と内容の理解・解釈

➤ 言語情報の正確な把握

理解のための方略を工夫しながら、
受け取った言語情報の構造や内容を
正確に把握

各教科等の特質に応じた指導例：

- 教科書や資料のどこを読めば必要な情報を得られるのかなど各教科固有の文章の読み方を理解させる
- 重要な語句に線を引いたりメモしたり、理解できないときに前に戻って読み直したり質問したり、要点を図式化するなど理解を助ける方略を適用できるようにする

➤ 自分なりの意味の理解・解釈

正確な把握と同時に、既知の知識と結びつ
けたり多様な視点から検討したりしながら、
自己にとっての深い意味理解・解釈の形成

各教科等の特質に応じた指導例：

- 黒板をただ写し取るのではなく自分の知っていることや考えたこと他の人の考えなども関連付けて書き加えるなどしてまとめるようにする
- 学習の要点として理解したことに加えて、一般化して言えそうなこと、具体的な事例、より詳しく知りたいことなどを説明させる

考えの形成

➤ 発信者の経験・感情等を踏まえた考えの形成

発信者の経験・感情・思考・意図を推察したり、そ
れらを踏まえ自らの意思をもち考えを形成するなど、
自他の経験や感情、意思と結びつける

各教科等の特質に応じた指導例：

- 他者の発言等の要点を理解した上で、発言の背景となる考えや経験、感情について推察できるようにする
- 理解・解釈した内容について、自分はどう思うか、どうしたいかを理由とともに明確にし、相互に交流することを通して自分の考えを補強したり見直したりできるようにする

表現・推敲

➤ 表現の過程での柔軟な調整

表現した後や表現の過程においても、
他者の受け取りを推察しながら、
表現の内容や方法を柔軟に
調整し、必要に応じて修正する

各教科等の特質に応じた指導例：

- メモをそのまま読むのではなく、相手の反応を見ながら言葉を選び直したり、非言語的手段を駆使したり、意図が十分に伝わっていないようなら表現した内容でも修正して話せるようにする
- 一度書き上げた文章を読み手の立場から読み直したり、互いに読み合ったりして、目的・場面・相手に応じた表現になるように修正できるようにする

➤ 表現の前の省察や吟味

表現しようとする内容や構成・表現形
式が、真に表現の目的を達成するか、
意図しない結果を招かないか等の視点
から省察し、表現を吟味する

各教科等の特質に応じた指導例：

- 表現を構想した後すぐに発表・記述等をするのではなく、表現の受け取り等を想定させ、省察・吟味できるようにする
- 表現しようとする内容や構成・表現形式を相互に参照し、受け取り方や改善の余地などについて検討させる

考えの形成

➤ 目的・場面・相手を踏まえた内容・構成の検討

自らの意思をもち考えを形成するとともに、形成し
た自らの考えや意図が目的に沿ったものか、相手に
正確に伝わるかなどの視点から内容や構成、表現
形式を検討

各教科等の特質に応じた指導例：

- 作品製作、レポート、発表などの多様な表現活動の中で、自分の考えや意図が目的や条件などを十分に踏まえているかを検討させる
- 目的や場面、相手に応じて言語情報を補足するのに効果的なメディアを選択し活用できるようにする

相手にどう受け取られるかを想像しつつ、自己の考えが伝わるよう工夫しながら豊かに表現

発信

「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」の可視化による「深い学び」の具現化

- 知識の理解も、それが生きて働くように深く学ぶことが重要。思考力、判断力、表現力等も、社会や生活で直面する未知の状況でも課題解決に繋げていけるよう「質」を高めることが重要（**資質・能力の「深まり」**）
- ある程度の知識・技能なしに思考・判断・表現することは難しいし、思考・判断・表現を伴う学習活動なしに、知識の深い理解と技能の確かな定着は難しい（**資質・能力の「一体的育成」**）
 ➡こうした「**資質・能力の深まり**」と「**資質・能力の一体的育成**」を学習指導要領上で可視化することにより、**資質・能力の関係性の理解や、それらを一体的に育成するための教師の単元づくりを助け、「深い学び」を授業で具現化しやすくする**

＜生きて働く＞

知識及び技能

他の学習や生活の場面でも活用できる

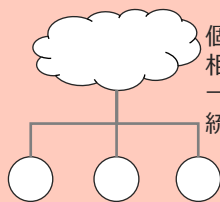
高次の資質・能力

知識及び技能に関する統合的な理解

個別の知識や技能が相互に関連付けられて一般化され、統合的な理解となった姿

（例）関数を使えば未知の状況を予測できる

資質・能力の
「深まり」の
可視化



個別の知識や技能が相互に関連付けられて一般化されながら統合的に理解される

個別の知識や技能

（例）
 ・比例・反比例の理解
 ・一次方程式の解き方
 ・二元一次方程式を関数としてみなせることの理解
 ・現実の事象を関数でモデル化できることの理解
 ・二次関数でモデル化できる事象があることの理解



資質・能力の
「一体的育成」
の可視化



＜未知の状況にも対応できる＞

思考力、判断力、表現力等

知識・技能を活用しながら、未知の場面でも課題を解決できる

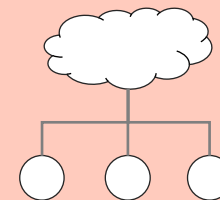
高次の資質・能力

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮

複雑な課題の解決に向けて、個別の思考力、判断力、表現力等を組み合わせたり選んだりして総合的に働かせた姿

（例）現実の事象を数式でモデル化し、未知の状況を予測して、具体的な解決策を選択する

資質・能力の
「深まり」の
可視化



複雑な課題の解決に向けて、個別の思考力、判断力、表現力等を総合的に働かせる

個別の思考力、判断力、表現力等

（例）
 ・二つの数量の変化・対応関係を見だし、式やグラフを用いて考察する
 ・現実の事象にある二つの数量の関係を関数と仮定して処理したりその結果に基づいて判断する



2. 内容の一層の構造化

【現状と課題】

1. 英語の目標・内容

- 前回改訂においては、「知・技」「思・判・表」を一体的に育成する過程を通して、「学びに向かう力、人間性等」を育成することとし、小中高で一貫した目標を実現するため、国際的な基準であるCEFRを参考に、5つの領域で英語の目標（以下「領域別目標」）を設定
- 現行の領域別目標は、以下の役割を担っている
 - ①「知・技」「思・判・表」を一体的に育成する目標であること
 - ②「外国語を使って何ができるようになるか」を明確化した目標であること
 - ③各学校が定めるCAN-DO形式の目標は、当該領域別目標を踏まえて作成されるものであること
- 一方、現行の学習指導要領の構造には、以下の課題があると考えられる
 - ・ 前回改訂において、「内容」が育成を目指す資質・能力を示すものとして再整理されたことに伴い、領域別目標と「内容」の「思・判・表現」の重複が生じている
 - ・ 「内容」の「思・判・表」が領域別目標を大綱化したものとなっているため、次期指導要領が目指す、「思・判・表」の深まりの可視化が難しい
 - ・ 学習評価においては、領域別目標をもとに評価規準を作成することとしているが、領域別目標は「知・技」「思・判・表」「学びに向かう力、人間性等」に整理されていない一方、評価はこれら3観点で行う必要がある
- 上記の課題や、企画特別部会及び総則・評価特別部会で示された目標・内容の構造化の方向性、本WG第4回で議論した小学校・中学校の指導内容を段階的に示す必要性に鑑み、現在の構造を見直す必要

【方向性と具体的論点（案）】

1. 英語の目標・内容

- 領域別目標の要素を「内容」（主に「思・判・表」）に移行し、話題や活動の段階的な高度化、「思・判・表」の深まりの可視化を可能とするよう、学年段階の目安とともに示すべきではないか
- これに伴い、英語の「目標」は、「内容」との重複を避け、外国語の「目標」と同様、「知・技」「思・判・表」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で示すべきではないか
 - ※「思・判・表」は、「知・技」を使って何ができるかを示すものであることから、領域別目標の要素が「内容」の「思・判・表」に移行したとしても、引き続き左記①～③の役割を果たしうるものと考えられる
- 上記の整理を行うことにより、以下の効果が生じると考えられる
 - ・ 「内容」の段階的な高度化、「思・判・表」の深まりを示すことが可能となり、教科書作成や授業づくりに資する（指導面の効果）
 - ・ 領域別目標の要素が「内容」に移ることで、「外国語を使って何かできるようになるか」のよりきめ細かな記載が可能となり、CEFRを参照しやすい構造となる（構造面の効果）
 - ・ 多くの教科と同様、「内容」をもとに評価規準を作成することが可能となり、観点別の評価がしやすくなる（評価面の効果）
 - ※学習評価の在り方は別途検討予定であるが、引き続き、「知・技」「思・判・表」について、5領域をバランスよく評価する方向で検討すべきではないか



【現状と課題】

2. 言語活動の例

- 従来、言語活動は、指導事項の中心として「内容」に位置付け
- 前回改訂において、「内容」が「知・技」「思・判・表」に整理されたことに伴い、「思・判・表」は「知・技」を活用して、言語活動を通して指導するとされ、領域別の言語活動が例示された
- 前回改訂で、「内容」は資質・能力を示すものとして再整理されたところ、言語活動は資質・能力そのものではないが、引き続き「内容」に規定されており、整理が必要

※言語活動の在り方については、5領域の活動を通した指導の在り方、活動と練習等との関係、英語使用と母語使用の関係等も含め、改めて議論予定

3. 言語の働き・使用場面の例

(1) 言語の使用場面の例

- 前回改訂前は、「言語活動の取扱い」の中で、言語活動で取り上げるべき使用場면을例示しており、前回改訂で「内容」に位置付け
- (上記の言語活動と同様に、) 資質・能力そのものではないが、「内容」に規定されており、整理が必要

(2) 言語の働きの例

- 前回改訂前は、「言語活動の取扱い」の中で、言語活動で取り上げるべき、言語が果たす機能や役割を「言語の働き」として例示しており、前回改訂で「内容」(「思・判・表」の後)に位置付け
- 一方、外国語の「目標」では言語の働きが「知・技」に位置付けられており、資質・能力との関係が分かりにくい
- また、例示の内容について、整理・見直しが必要

4. 表形式での示し方

- 企画示された方向性を踏まえ、表形式での示し方を検討することが特別部会及び総則・評価特別部会で必要



【方向性と具体的論点(案)】

2. 言語活動の例

- 資質・能力そのものではないことから、「内容」ではなく、「内容の取扱い」に位置付けることが適当ではないか

3. 言語の働き・使用場面の例

(1) 言語の使用場面の例

- (上記の言語活動と同様に、)「内容」ではなく、「内容の取扱い」に位置付けることが適当ではないか

(2) 言語の働きの例

- 外国語の「目標」において「知・技」に位置付けられていることとの整合性や、言語活動を行う場合のみならず、常に言語の働きを意識した指導が重要であると考えられることから、例示の内容について整理・見直した上で、「内容」の「知・技」に位置付けることが適当ではないか

4. 表形式での示し方

- 英語については、「知・技」の内容のまとまりに対応した固有の「思・判・表」が想定しにくく、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを支えながら一体的に育まれていく構造であると考えられ、総則・評価部会で示された「並行」パターンでの表形式化が適当ではないか
- その際、「思・判・表」を上、「知・技」を下に配置することで、前者の方が重要であるといった誤解や、後者を先に身につけないと前者が身につかないといった誤解を生まないよう、「知・技」「思・判・表」は一体的に育まれるという考え方を強調することが重要

表形式による構造化パターン②（並行パターン）

令和7年10月14日
総則・評価特別部会
資料1-1 P11

資質・能力の深まりの可視化

		○学年相当	○学年相当	○学年相当
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 知識・技能を活用しつつ、思考力・判断力・表現力等を総合的に発揮して複雑な課題を解決できる力を示す（検討項目④で詳細を検討）	(1) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
	(2) 項目名	(小見出し) ・ ・	下に示す知識及び技能を活用しながら、左に示す複雑な課題の解決をする上で必要な要素となる思考力、判断力、表現力等を示す。 （検討項目⑤で詳細を検討）	
	(3) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
知識及び技能に関する統合的な理解 この内容のまとまりを通じて獲得して欲しい統合的な理解等を示す（検討項目④で詳細を検討）	(1) 項目名	(小見出し) ・ ・	左に示す統合的な理解を獲得し、上に示す思考・判断・表現を豊かにするために必要となる知識及び技能を示す（検討項目⑤で詳細を検討）	
	(2) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
	(3) 項目名	(小見出し) ・ ・	学年相当に分けて示す必要がない場合は、可能な限り繰り返しを避け、セルを統合して示すなど簡素な示し方となるよう工夫する。	
	(4) 項目名	(小見出し) ・ ・		
(内容の取扱い)				

資質・能力の一体的育成の可視化

※表の読み方を示す柱書きや、見出しや各項目の番号の示し方等の平仄については告示の検討に際して技術的に検討

1. 「高次の資質・能力」の可視化の目的

- 検討項目③では表形式での内容の構造化で、
 - ✓ 「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化
(従前の「タテ」の関係の可視化)
 - ✓ 「知・技」「思・判・表」の一体的育成の可視化
(従前の「ヨコ」の関係の可視化)

を図ることにより、資質・能力の関係性の理解に基づき、それらを一体的に育成する単元づくりを助け「深い学び」を具現化しやすくする方策を検討した

- このうち特に、「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」(※以下、総称して「高次の資質・能力」)を示すことについては、「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化を通じて「深い学び」を実現する単元づくりのイメージを教師が持てるようにする役割を担うもの

※論点整理では、「知・技」の深まりを示すものを「中核的な概念の深い理解」、「思・判・表」の深まりを示すものを「複雑な課題の解決」と仮称し、それらをまとめて「中核的な概念等」と呼んでいたが、新たな用語が増えることを避けるため現行でも用いられている言葉を用いることとしたもの。「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」をまとめて呼称する際、以後「高次の資質・能力」と呼ぶこととする。これらの用語の在り方については、各教科等WGでの具体的な議論も踏まえた上で、学校現場に趣旨が適切に伝わるものとなっているかという視点から継続的に検討。

2. 各WGでの検討に当たっての考え方

- こうした役割を果たす「高次の資質・能力」を各WGで具体的に抽出する際、各教科等固有の学習過程の改善を図るためには、教科ごとの特質に応じて検討が行われる必要があります、書きぶりを現時点で一律に整理すべきものではない
- 一方で、各教科等での「高次の資質・能力」は、備えるべき要素や性質等について、一定の共通性があることにより、各教科等を横断して適切に機能を発揮することが期待できる
- 各教科等の独自性を活かしつつ、共通に備えるべき要素や性質等が確保された「高次の資質・能力」の書きぶりとなるよう、次頁のように「高次の資質・能力」がその目的を踏まえたものとなっていることを担保するチェックポイントを示した上で、各教科等WGでの検討を深めてはどうか(次頁参照)
- なお、「全てのポイントに照らして異論の余地のない」ものを検討することは困難な場合も考えられるため、各教科等の授業改善に資する点を重視しつつ検討を進めるべきではないか

「高次の資質・能力」を検討する上でのチェックポイント（案）

【A 教科等の本質的意義の中核に照らした重要性の観点】

- ・目標の達成に資する上で重要であるとともに、各教科等の本質的意義の中核（「見方・考え方」）に照らし適切なものであるといえるか

【B 資質・能力の深まりを示す観点】

- ・要素となる個別の資質・能力の「深まり」を示す事ができているか。具体的には、内容のまとまりを単に要約した「見出し」に留まるのではなく、個別の資質・能力が児童生徒の中で相互に関連付けられて、統合的に獲得された際の姿を示すことができているか
- ・要素となる個別の資質・能力を学ぶことの意義（※）や、それを広く社会において、いつ、どのような文脈で活用することができるのか、を教師がイメージしやすいものとなっているか

（※）学ぶことの「意義」は必ずしも実生活における実用的な側面にとどまらない点に留意

【C 深い学びを実現する単元づくりを助ける観点】

- ・教師が単元構想時に、「知識及び技能の統合的な理解」と、それにぶら下がる個別の「知・技」、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、単元を通じて児童生徒が追究する本質的な「問い」を構想する上で参考になるか
- ・教師が単元構想時に、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、論述・レポート・発表・作品製作等、単元を通じて児童生徒が資質・能力を総合的に発揮しながら取り組む課題を構想する上で参考になるか

【D 分かりやすさ等の観点】

- ・経験の浅い教師も含めて、一人一人の教師にとって、分かりやすく、使いやすいことに加え、教科等の面白さや魅力が伝わる文言となっているか（学習・指導を通じて、最終的には児童生徒自身が掴むことができる必要があるという点も留意）
- ・学校種・学年等、発達段階に即して妥当なものとなっているか（系統性等の重視により、発達段階に照らし過度に抽象的となっていないか等）

構造化のイメージ（中学校の例）

現状

外国語の目標

知識及び技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力・
人間性等

英語の目標（領域別目標）

聞く
こと

読む
こと

話すこと
(やり取り)

話すこと
(発表)

書く
こと

内容

知識及び技能

音声/符号/語、連語及び慣用表現/文、文構造及び文法事項

思考力・判断力・表現力等

言語活動(例)

聞く
こと

読む
こと

話すこと
(やり取り)

話すこと
(発表)

書く
こと

言語の使用場面(例)

言語の働き(例)

内容の取扱い

言語材料の段階的な指導、指導内容や指導方法の工夫 など

※改善イメージにおいても引き続き記載

改善イメージ

外国語の目標

知識及び技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力・
人間性等

英語の目標

英語の目標は3つ
の柱で整理

知識及び技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力・
人間性等

内容

CEFRの分類も踏
まえて3つに整理
(P20)

思考力・判断力・表現力等

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 (P20)
(理解する) (表現する) (伝え合う)

聞く
こと

読む
こと

話すこと
(やり取り)

話すこと
(発表)

書く
こと

知識及び技能

「並行」パターンで示す

知識及び技能に関する統合的な理解 (P20)

言語の働きを「知・
技」に位置付ける

音声/符号/語、連語及び慣用表現/文、文構造及び文法事項、言語の働き(例) など

※技能は5領域と関連付けて示す

内容の取扱い

言語活動(例)

「内容」は資質・能力に限
定し、「言語活動の例」と
「言語の使用場面の例」
は内容の取扱いへ

聞く
こと

読む
こと

話すこと
(やり取り)

話すこと
(発表)

書く
こと

言語の使用場面(例)

- 「英語の目標」は「外国語の目標」に準じて規定してはどうか
- CEFRでReception・Production・Interactionに分かれている点も踏まえ、「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮」については、理解する・表現する・伝え合うに分けて記載してはどうか

※ なお、CEFRでは Interaction と Production 両方に「話すこと」が位置付けられていることを踏まえ、前回改訂で「話すこと[やり取り]」と「話すこと[発表]」の2領域を設けた。

同様に、「書くこと」も Interaction と Production の両方に位置付けられているが、学習評価の負担等も考慮し、新たな領域を設けるのではなく、書くことによる「やり取り」の活動を充実する方向で対応すべきではないか。

見方・考え方

見方

考え方

外国語及び外国語によるコミュニケーションを、
文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、
他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること

英語の目標

小学校 外国語活動

英語によるコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を、【P】聞くこと、話すことの言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

小学校 外国語

英語によるコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を、【P】聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

中学校

英語によるコミュニケーションを図る資質・能力を、【P】聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

高等学校（新たな英コミュ）

※第6回に提示予定

内容

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮

思・判・表

小学校 外国語活動

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、ごく身近な話題について、
①情報などを聞き、内容を推測できるようにする。【理解する】
②相手を意識しながら、自分の考えや気持ちなどを話して伝えられるようにする。【表現する】
③相手を意識しながら、自分の考えや気持ちなどを伝え合い、相手を理解しようとする。【伝え合う】

小学校 外国語

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近な事柄について、
①聞いて得た情報を理解し、考えを形成するとともに、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現の意味を考えながら読むことができる。【理解する】
②自分の考えや気持ちなどを整理し、語句や表現を選んで相手に話して伝えるとき、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を用いて、書いて伝えることができる。【表現する】
③自分の考えや気持ちを整理し、語句や表現を選んで伝え合い、相互理解を図れるようにする。【伝え合う】

中学校

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、様々な話題について、
①聞いたり読んだりして得た情報を整理したり、既にもっている知識や経験と比較したり関連付けたりして、理解し、考えを形成することができる。【理解する】
②事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、表現等を工夫して他者に伝えることができる。【表現する】
③相手が話したり書いたりした内容を受け止めながら事実や自分の考え、気持ちなどを相手に伝わるように表現等を工夫して伝え合い、相互理解を深められるようにする。【伝え合う】

高等学校（新たな英コミュ）

※第6回に提示予定

※イメージは
P21～23

知識及び技能に関する統合的な理解

知・技

小学校 外国語活動

英語と日本語との違いなどに体験を通して気付き、慣れ親しむことで、言葉の面白さや豊かさを理解できる。

小学校 外国語

音声や語彙、表現、文構造、言語の働きなどを捉え、これらの知識を、場面や状況に応じて組み合わせることで、英語による理解や表現の質を高めることを理解できる。

中学校

音声や語彙、表現、文構造、文法、言語の働きなどを捉え、これらの知識を、場面や状況に応じて組み合わせることで、英語による理解や表現の質を高めることを理解できる。

高等学校（新たな英コミュ）

※第6回に提示予定

※イメージは
P21～23

構造化のイメージ（小・外国語活動の例）

※P19のイメージを踏まえて構造化

※P25～27で整理

外国語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
見方・考え方	外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること		
英語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
	英語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	ごく身近な事柄について、英語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、粘り強く自分の考えや気持ちを伝えるとともに、相手を理解しようとする態度を養う。

内容

	高次の資質・能力	領域	第3学年相当		第4学年相当
思考力、判断力、表現力等	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、ごく身近な話題について、 ① 情報などを聞き、内容を推測できるようにする。 【理解する】 ② 相手を意識しながら、自分の考えや気持ちなどを話して伝えられるようにする。 【表現する】 ③ 相手を意識しながら、自分の考えや気持ちなどを伝え合い、相手を理解しようとする。 【伝え合う】	聞くこと	話題	相手のことや身の回りの物	ごく身近な事柄
			条件	ゆっくりはっきりと話されれば	
			できること	(ア) 簡単な語句や基本的な表現を聞き取るようにする	
		話すこと（やり取り）	話題	基本的なやり取りに関する事柄 自分ことや身の回りの物	自分や相手のこと及びごく身近な事柄
			条件	簡単な語句や基本的な表現を用いて (ア) 挨拶、感謝、指示をしたりそれらに応じたりするようにする（※基本的なやり取りに関する事柄に対応） (イ) 動作を交えながら、自分の考えや気持ちを伝え合うようにする（※自分ことや身の回りの物に対応） (ウ) サポートを受けて、質問をしたり質問に答えたりするようにする（※自分や相手のこと及びごく身近な事柄）	
			できること		
		話すこと（発表）	話題	身の回りの物について 自分のことについて	ごく身近な事柄について
			条件	簡単な語句や基本的な表現を用いて	
			できること	(ア) 人前で実物などを見せながら、話すようにする	
		知識及び技能	英語と日本語との違いなどに体験を通して気づき、慣れ親しむことで、言葉の面白さや豊かさを理解できる。	英語の特徴等に関する事項	ア 音声
イ 文字	文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする ・文字の名称を表す読み方を聞いて、大文字や小文字と結びつけられるようにする ・身の回りの物を表す語句の発音を聞いて、何を指しているか分かるようにする				
【P】言語の働きに関する事項 (pragmatic competence)	次の事項について、使用される場面やその働きに、体験的に気付くようにする				
	ア 【P】対人関係形成・創造 (interpersonal)				・・・
	イ 【P】情報交換・要件遂行 (transactional)				・・・
	ウ 【P】問題解決・合意形成 (evaluative)				・・・
文化	・日本と外国との生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考え方があることに気付くようにする ・異なる文化を持つ人々との交流などを体験し、文化等に関する理解を深めるようにする				

(思・判・表) 第4回の議論を踏まえ、
現行の英語の領域別目標を元に、
話題とできることについて段階的に示す

文字の取扱い (知・技)
について丁寧に示す

（思・判・表）第4回の議論を踏まえ、現行の英語の領域別目標を元に、話題とできることについて段階的に示す

文字の取扱い（知・技）について丁寧に示す

※高次の資質・能力以外の内容の具体的な文言は、告示にあたり別途検討

※第4回で議論した、校種間の接続のための留意事項（各学校段階で確実に身に付けさせるべき事項と、前学校種からの学びの接続のために重点をおいて指導すべき事項）については主として「内容の取扱い」に記載してはどうか（小学校外国語科、中学校も同様）

構造化のイメージ（小・外国語の例）

※P19のイメージを踏まえて構造化

※P25～27で整理

外国語の目標		知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		学びに向かう力・人間性等	
見方・考え方		外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること					
英語の目標		知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		学びに向かう力・人間性等	
内容		外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどを理解するとともに、読むこと、書くことにおいて慣れ親しみ、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。		コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ英語の語彙や基本的な表現を読んだり書いたりして伝え合うことができる基礎的な力を養う。		英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を図ろうとする態度を養う。	
高次の資質・能力		領域		第5学年相当		第6学年相当	
思考力、判断力、表現力等	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近な事柄について、 ①聞いて得た情報を理解し、考えを形成するとともに、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現の意味を考えながら読むことができる。 【理解する】 ②自分の考えや気持ちなどを整理し、語句や表現を選んで相手に話して伝えるときにも、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を用いて、書いて伝えることができる。 【表現する】 ③自分の考えや気持ちを整理し、語句や表現を選んで伝え合い、相互理解を図れるようにする。【伝え合う】	聞くこと	話題	自分のことや相手のこと 身近な事柄		（思・判・表）第4回の議論を踏まえ、 現行の英語の領域別目標を元に、 話題とできることについて段階的に示す	
			条件	ゆつくりはっきりと話されれば			
			できること	（ア）簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができる （イ）具体的な情報を聞き取ることができる （ウ）短い話の概要を捉えることができる			
		読むこと	話題	自分のことや相手のこと 身近な事柄		読むことについて丁寧に示す	
			条件	音声で十分に慣れ親しんだ上で 簡単な語句や基本的な表現を識別し、情報を得ることができる			
			できること	基本的なやり取りに関する事柄 自分のことや相手のこと及び身近な事柄			
		話すこと（やり取り）	話題	自分のことや相手のこと及び身近な事柄			
			条件	簡単な語句や基本的な表現を用いて （ア）挨拶をしたり、指示や依頼に応じたりすることができる（※基本的なやり取りに関する事柄に対応） （イ）自分の考えや気持ちなどを述べ合うことができる（※自分のことや相手のこと及び身近な事柄に対応） （ウ）その場で質問したり質問に答えたりして、伝え合うことができる（※自分のことや相手のこと及び身近な事柄に対応）			
			できること				
		話すこと（発表）	話題	自分のことや身近な事柄			
			条件	簡単な語句や基本的な表現を用いて （ア）自分の考えや気持ちを話すことができる （イ）自分の考えや気持ちを伝えようとする内容を整理した上で、話すことができる			
			できること				
知識及び技能	音声や語彙、表現、文構造、言語の働きなどを捉え、これらの知識を、場面や状況に応じて組み合わせることで、英語による理解や表現の質を高めることを理解できる。	書くこと	話題	自分のことや相手のこと 身近な事柄		書くことについて丁寧に示す	
			条件	音声で十分に慣れ親しんだ上で			
			できること	例となる語句や表現を参考に、自分の考えや気持ちなどを表す語句や表現を選んで書くことができる			
		英語の特徴等に関する事項	ア 音声	音声の特徴を理解し、読んだり話したりする際に、場面、状況に応じて活用できる。また、聞いたり話したりする際に、音声の特徴に気が付き、場面に応じて活用できる …		文字の取扱いについて丁寧に示す	
			イ 文字及び符号	英語の文字を識別し、その読み方を発音したり、大文字、小文字を書いたりできるようにすることができる。また、符号の意味や使い方を理解し、場面に応じて活用できる ・大文字や小文字の形を認識し、名称の読みができる ・音声と語句や表現を結びつけたり、音声と文字との関係に慣れ親しんだりすることができる ・コミュニケーションを行うために文字を書くことを意識させ、文字の形や長さなどを理解して、丁寧に語句や表現を書き写すことができる ・終止符や疑問符、コンマなどの基本的な符号の使い方を理解することができる			
			ウ 語、連語及び慣用表現	語、連語及び慣用表現が用いられる場面において、音声を中心に意味や使い方を理解することができる …			
		【P】言語の働きに関する事項	エ 文及び文構造	日本語と英語の語順の違い等に関心するとともに、場面に応じて活用できる。なお、文を書き写す際には、語と語の区切りに注意して書き写すことができる ・文 … ・文構造 …			
			ア …				
			イ …				
			ウ …				

※高次の資質・能力以外の内容の具体的な文言は、告示にあたり別途検討 ※文化等の理解については内容の取扱いや活動の例示で示す

構造化のイメージ（中学校の例）

※P19のイメージを踏まえて構造化

外国語の目標		知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		学びに向かう力・人間性等										
見方・考え方		外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること														
英語の目標		知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		学びに向かう力・人間性等										
内容		英語の音声や語彙、表現、文構造、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。		コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、様々な話題について、英語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。		英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を深めようとする態度を養う。										
思考力、判断力、表現力等	高次の資質・能力	領域	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、様々な話題について、 ①聞いたり読んだりして得た情報を整理したり、既にもっている知識や経験と比較したり関連付けたりして、理解し、考えを形成することができる。【理解する】 ②事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、表現等を工夫して他者に伝えることができる。【表現する】 ③相手が話したり書いたりした内容を受け止めながら事実や自分の考え、気持ちなどを相手に伝えるように表現等を工夫して伝え合い、相互理解を深められるようにする。【伝え合う】	話題	日常的な話題		（思・判・表）第4回の議論を踏まえ、 現行の英語の領域別目標を元に、 話題とできることについて段階的に示す									
					条件	身近な社会的な話題										
						できること		簡単な語句や文で、はっきりと話されれば （ア）必要な情報を聞き取ることができる （イ）概要を捉えることができる （ウ）要点を捉えることができる								
								条件	簡単な語句や文で書かれた （ア）必要な情報を読み取ることができる （イ）概要を捉えることができる （ウ）要点を捉えることができる							
									できること	身近な話題 （自分にとって）興味関心のある話題						
										条件	身近な社会的な話題					
											できること	簡単な語句や文を用いて （ア）自分の考えや気持ちなどを即興で伝え合うことができる（※身近な社会的な話題については対象としない） （イ）事実や自分の考え、気持ちなどを整理し伝え合うことができる （ウ）聞いたり読んだりしたことを基に、考えたことや感じたこと、その理由などを伝え合うことができる				
												条件	（ア）自分の考えや気持ちなどを即興で話すことができる（※身近な社会的な話題については対象としない） （イ）事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある内容を話すことができる （ウ）聞いたり読んだりしたことを基に、考えたことや感じたこと、その理由などを話すことができる			
													できること	（ア）情報や自分の考え、気持ちなどを文で書くことができる （イ）事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書くことができる （ウ）聞いたり読んだりしたことを基に、考えたことや感じたこと、その理由などを書くことができる		
														条件	音声の特徴を理解し、読んだり話したりする際に、場面、状況に応じて活用できる。また、聞いて意味を捉える際に、音声の特徴についての知識を活用できる …	
															イ 符号	符号の意味や使い方を理解し、場面、状況に応じて活用できる …
ウ 語、連語及び慣用表現	語の綴り、連語及び慣用表現の形態の意味や使い方を理解できる 聞いたり読んだりする際に、文脈に応じて活用できる。頻度の高いものについては、話したり書いたりする際にも、場面、状況に応じて活用できる …															
	エ 文、文構造及び文法事項	文、文構造及び文法事項の意味、形、働きを理解し、場面、状況に応じて活用できる ・文 … ・文構造 … ・文法事項 …														
		【P】言語の働きに関する事項	次の事項について、使用される場面や状況でどのような働きをするのかを理解し、場面、状況に応じて活用できる ア … …													

(思・判・表) 第4回の議論を踏まえ、
現行の英語の領域別目標を元に、
話題とできることについて段階的に示す

※高次の資質・能力以外の内容の具体的な文言は、告示にあたり別途検討 ※文化等の理解については内容の取扱いや活動の例示で示す

(参考) 現行学習指導要領 外国語の構成 (中学校の例)

第1 目標

- (1)知識及び技能
- (2)思考力、判断力、表現力等
- (3)学びに向かう力、人間性等

第2 各言語の目標及び内容等

英語

1 目標

- (1)聞くこと
ア …
イ …
ウ …
- (2)読むこと アイウ
- (3)話すこと [やり取り] アイウ
- (4)話すこと [発表] アイウ
- (5)書くこと アイウ

2 内容

〔知識及び技能〕

(1)英語の特徴やきまりに関する事項

- ア 音声
- イ 文字及び符号
- ウ 語、連語及び慣用表現
- エ 文、文構造及び文法事項

〔思考力、判断力、表現力等〕

(2)情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項

- ア 日常的な話題や社会的な話題について、英語を聞いたり読んだりして必要な情報や考えなどを捉えること。
- イ 日常的な話題や社会的な話題について、英語を聞いたり読んだりして得られた情報や表現を、選択したり抽出したりするなどして活用し、話したり書いたりして事実や自分の考え、気持ちなどを表現すること。
- ウ 日常的な話題や社会的な話題について、伝える内容を整理し、英語で話したり書いたりして互いに事実や自分の考え、気持ちなどを伝え合うこと。

(3)言語活動及び言語の働きに関する事項

① 言語活動に関する事項

イ 聞くこと

- (ア) … (活動の例)
- (イ) …
- (ウ) …
- (エ) …

イ 読むこと (ア)(イ)(ウ)(エ)

ウ 話すこと [やり取り] (ア)(イ)(ウ)

エ 話すこと [発表] (ア)(イ)(ウ)

オ 書くこと (ア)(イ)(ウ)(エ)

② 言語の働きに関する事項

ア 言語の使用場面の例

(ア)(イ)

イ 言語の働きの例

(ア)コミュニケーションを円滑にする

- ・ 話し掛ける ・ 相づちを打つ ・ 聞き直す ・ 繰り返す など

(イ)気持ちを伝える (ウ)事実・情報を伝える

(エ)考えや意図を伝える (オ)相手の行動を促す

3 指導計画の作成と内容の取扱い

- (1) …
- (2) …
- (3) …

その他の外国語

…

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

…

目標における「知識及び技能」のイメージ（Ver.2）

【第3回の案に対する御意見への対応】

- ・小・外国語：「読むこと」「書くこと」は外国語活動で取り扱っていないことから、まず慣れ親しんだ上で身に付けるというプロセスが重要であり、この点は引き続き明示してはどうか。
日本語と外国語との違いに気付いた上で理解するというプロセスについては「内容」で明示し、端的に記載する観点から「目標」からは省略してはどうか。
- ・中高：中学校においては、小学校との接続の観点から「文構造」を明示してはどうか。一方、高校においては、「文構造」を明示する必要性は薄く、むしろ加わることで文法重視の印象が高まる懸念があるため、現行のままとしてはどうか。
- ・高校：「目的や場面、状況などに応じて」については「適切に」を補足するものであることから「内容」で明示し、端的に記載する観点から「目標」からは省略してはどうか。

現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、 日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに 、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、 日本語と外国語との違いに気付く 、これらの知識を理解するとともに、 読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、 聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、 聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。



改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどを理解するとともに、 読むこと、書くことにおいて慣れ親しみ、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、 文構造 、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて 活用できる技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、 文法 、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて 適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

目標における「思考力、判断力、表現力等」のイメージ（Ver.2）

【第3回の案に対する御意見への対応】

- ・小・外国語：「推測しながら」「語順を意識しながら」は「内容の取扱い」で明示し、端的に記載する観点から「目標」からは省略してはどうか。
- ・中高：「日常的な話題」や「社会的な話題」は「内容」で明示すること、また、「身近な社会的な話題」を位置づけることから、「目標」では「様々な話題」、「幅広い話題」としてはしてはどうか。
- ・高：既にできることをさらに円滑にすること等については、指導のプロセスであり「内容の取扱い」に位置づけるべきではないか。

※上記に加え、小学校の話題について第4回の内容を踏まえ修正

現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。</u>	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</u>	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</u>



改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
<u>ごく身近な</u> 事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>身近な</u> 事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を <u>読んだり書いたりして、伝え合うことができる基礎的な力を養う。</u>	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>様々な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</u>	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>幅広い話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</u>

目標における「学びに向かう力、人間性等」のイメージ（Ver.2）


現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、 <u>他者</u> に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、 <u>聞き手、読み手、話し手、書き手</u> に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、 <u>自律的に</u> 外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。



改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、粘り強く自分の考えや気持ちを伝えようとするとともに、相手を理解しようとする態度を養う。	外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、 <u>対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を図ろうとする態度を</u> 養う。	外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を <u>深めようとする態度を</u> 養う。	外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を <u>深め、外国語の習得に継続して取り組もうとする態度を</u> 養う。



**(参考) 外国語を学ぶ本質的意義等を踏まえた
話題・活動等の在り方**

話題の改善イメージ（中学校の例）（Ver. 2）

現状

取り扱う話題が学年別で示されておらず、様々な難易度のものが混在

中1～中3

生徒の日々の生活に関わる話題のうち、生徒にとって身近な学校生活や家庭生活などにおけるもの

生徒の興味・関心の対象となることや社会生活で必要なこと

（例）

自分に関すること

- ・自分の好きなことや嫌いなこと、趣味、日常的に行っていることや過去の行動などに関する事柄
- ・住んでいる場所や部屋の様子、行きたい場所、所有しているもの、好きな動植物や飼っているペット
- ・1日の日課、週末や長期休暇の出来事や計画、将来の夢
- ・学校生活における出来事、学校行事（修学旅行先、部活動）

友達や家族、教師等に関すること

- ・家庭生活における出来事、友人や教師が休日を過ごした中で感じたこと、ALTの好きなものや体験（お気に入りの日本食、旅行中に体験したこと）

相手に関すること

- ・外国の中学生の学校生活

その他

- ・天気予報、交通情報、製品の取扱い方、スポーツクラブのパンフレット

社会で起こっている出来事や問題に関わる話題

（例）エネルギー問題、環境問題（地球温暖化、自然との共存等）、世界情勢、科学技術、平和問題、人権問題、国際協力、ICTの普及、社会貢献

身近な事柄

（例）友達からの招待、電話の留守電機能にあるメッセージ

関心のある事柄

自分が関心をもっていること

（例）趣味や好き嫌い、日記や短い説明

身の回りのことで生徒が共通して関心をもっていること

（例）スポーツ、音楽、映画、テレビ番組、学校行事（文化祭など）、休日の計画、日常の出来事

※現行の解説を基に作成

改善イメージ

各学年で取り扱うべき話題の難易度を整理し、身近なものから段階的に抽象的なものを取り扱うよう改善

中1相当

中2相当

中3相当

聞くこと・読むこと

日常的な話題

（例）友達、家族、学校、地域、店、公共機関 など

身近な社会的な話題

（例）健康的な食生活、スクリーンタイム、皆が過ごしやすい学校づくりなど
※フェイクニュース、インバウンド、外国人から見える日本、国際協力などについては生徒が興味をもったり自分事化できるように内容を工夫

話すこと・書くこと

日常的な話題

ごく身近な事柄や出来事について

（例）自分のこと、相手と共通して関心をもっていること

身近な話題について

（例）身の回りのこと、相手と共通して持っている話題（学校、地域）

（自分にとって）興味・関心のある話題

※相手が必ずしも興味・関心をもっているとは限らない

身近な社会的な話題

※上記話題の例はたたき台であり、告示や解説の検討の際に具体例について検討

AI時代に外国語を必修とする「本質的意義」の再整理 (Ver. 3)

－ 自らの人生を舵取りできる、多様な他者と協働できる資質・能力への貢献の観点から －

1. 言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと

● 異なる言語・文化への理解を促す

- 自らと異なる他者の言語や文化等との接触・理解・共感・受容
- 言語習得の困難の経験による外国人や日本語学習者の立場・心情の理解
- ➡ 以上が相まって、多様な主張や価値観への寛容性を生み、多様性の包摂や多文化共生に対する理解を促す可能性

● 母語や自国の文化のメタ認知を促す

- 外国語と対比されることにより、母語の特徴や良さの認知に繋がる
- 外国の文化と対比されることにより、自国の文化への理解が深まる
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される

● コミュニケーションへの深い理解を促す

- 言語や文化のメタ認知やコミュニケーション等の経験を通じた相手意識の向上
 - ・相手の言葉や意図の受け止め方（聞く・読む）
 - ・相手や相手の文化への配慮、コミュニケーションの目的、場面や状況等に応じた表現、自分の言葉の分かりやすさ（「やさしい日本語」にも繋がる）（話す・書く）
- 伝わらないもどかしさや失敗を乗り越えるレジリエンスや伝わることによる自己肯定感等の高まり、それらを行き来する経験
- ノンバーバル・コミュニケーションの重要性の理解や表現方法の工夫（アイコンタクト、間の取り方、身振り・手振り等）
- ➡ 以上が相まって、翻訳ツール等によるやり取りを超えた、生身の身体を有する人間同士のリアルなコミュニケーションへの関心・意欲を促す可能性

2. 自分の考えが磨かれて思考が深まる、人間関係が豊かになること

● 外国語を介して、自分の考え・意見の形成・整理が促進される

- 外国語を通じて流通する多様な主張や価値観、感性への接触・受容
- 外国語で対話・協働するために、普段から自分の考え・意見を整理したり、外国語ならではの論理展開で伝える意識が向上する
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される（再掲）
- ➡ アウトプットを意識した効果的インプットや論理的思考力の伸長を促す可能性

● 人間関係の質・量が豊かになり、得られる情報も増える

- 世界中の様々な人々と直接つながり、信頼関係の構築が可能となる
- 人間同士のリアルなコミュニケーションにより、翻訳やAIを介する場合と比べて得られる情報が格段に広がり、多面的視野に繋がる
- 異なる言語でのコミュニケーションを通じて新たな自分を発見できたり、より広い視野から自分の好き・得意を考えたり、複言語・複文化の強みを生かして将来の選択肢が広がる可能性も

※現在のAI技術を前提とした場合ではあるが、AIにより手軽に翻訳・通訳が可能となる中であっても、出力の正確性・適切性を批判的に検討したり、ツールの力も使いつつも、リアルなコミュニケーションを行ったりするためには相応の英語力が必要という視点や、外国語によるコミュニケーションのためにAI技術を効果的に活用する力が必要という視点もある

※これらは外国語を学校教育で必修とすることの意義を卒業後も継続的に学習した場合も想定しながら整理したものであり、これらの全てが、全ての児童生徒において、初等中等教育の過程で高いレベルで発現すると考えているものではない

※AI技術が今後も予想を超える速さで進歩することを踏まえると、AIに代替されるべきではない、人間に残したい部分は何かを重視する必要（下線部分）

よりよい社会
(社会のウェルビーイング)

- 多様性の包摂、国内外の多様な他者との共生・共創
- グローバルな視点・情報を駆使した価値創造・課題解決
- 持続可能な民主主義・平和な社会の構築

幸福な人生
(個人のウェルビーイング)

- 国内外の多様な他者と直に意思疎通できる安心感・自信、豊かな人間関係
- 言葉の壁や国境を越えて自らの人生を舵取り（進学・留学・就職）
- 思考の多様性・柔軟性、価値観の再構築

(参考)「本質的意義」の再整理を踏まえた「見方・考え方」と「目標」の検討の方向性 (たたき台)

「本質的意義」の要素については、「見方・考え方」と「目標」のみならず、本質的意義の要素は引き続き「内容」等の検討においても各趣旨を反映していくこととしてはどうか。

1. 言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと

● 異なる言語・文化への理解を促す

- 自らと異なる他者の言語や文化等との接触・理解・共感・受容
⇒ **見方・考え方と目標** (学びに向かう力・人間性等) を中心に反映してはどうか
- 言語習得の困難の経験による外国人や日本語学習者の立場・心情の理解
⇒ **上記の理解が促されるよう、内容 (話題や活動)** を工夫してはどうか
- ➡ 以上が相まって、多様な主張や価値観への寛容性を生み、多様性の包摂や多文化共生に対する理解を促す可能性

● 母語や自国の文化のメタ認知を促す

- 外国語と対比されることにより、母語の特徴や良さの認知に繋がる
⇒ **見方・考え方と内容 (話題や活動)** を中心に反映してはどうか
- 外国の文化と対比されることにより、自国の文化への理解が深まる
⇒ **見方・考え方と内容 (話題や活動)** を中心に反映してはどうか
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される
⇒ **動機付けが促されるよう、内容 (話題や活動)** を検討してはどうか

● コミュニケーションへの深い理解を促す ⇒ 全体として **見方・考え方** に反映してはどうか

- 言語や文化のメタ認知やコミュニケーション等の経験を通じた相手意識の向上
・相手の言葉や意図の受け止め方 (聞く・読む)
・相手や相手の文化への配慮、コミュニケーションの目的、場面や状況等に応じた表現、自分の言葉の分かりやすさ (「やさしい日本語」にも繋がる) (話す・書く)
⇒ **目標 (思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力・人間性等)** を中心に反映してはどうか
- 伝わらないもどかしさや失敗を乗り越えるレジリエンスや伝わることによる自己肯定感等の高まり、それらを行き来する経験
⇒ **目標 (学びに向かう力・人間性等)** を中心に反映してはどうか
- ノンバーバル・コミュニケーションの重要性の理解や表現方法の工夫 (アイコンタクト、間の取り方、身振り・手振り等)
⇒ **内容 (言語の働き、言語活動の解説等)** を中心に反映してはどうか
- ➡ 以上が相まって、翻訳ツール等によるやり取りを超えた、生身の身体を有する人間同士のリアルなコミュニケーションへの関心・意欲を促す可能性

2. 自分の考えが磨かれて思考が深まる、人間関係が豊かになること

● 外国語を介して、自分の考え・意見の形成・整理が促進される

- 外国語を通じて流通する多様な主張や価値観、感性への接触・受容
⇒ **見方・考え方と目標 (思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力・人間性等)** を中心に反映してはどうか
- 外国語で対話・協働するために、普段から自分の考え・意見を整理したり、外国語ならではの論理展開で伝える意識が向上する
⇒ **見方・考え方と目標 (思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力・人間性等)** を中心に反映してはどうか
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される (再掲)
⇒ **動機付けが促されるよう、内容 (話題や活動)** を検討してはどうか
- ➡ アウトプットを意識した効果的インプットや論理的思考力の伸長を促す可能性

● 人間関係の質・量が豊かになり、得られる情報も増える

⇒ 全体として **見方・考え方によって導かれるもの** として整理してはどうか

- 世界中の様々な人々と直接つながり、信頼関係の構築が可能となる
- 人間同士のリアルなコミュニケーションにより、翻訳やAIを介する場合と比べて得られる情報が格段に広がり、多面的視野に繋がる
- 異なる言語でのコミュニケーションを通じて新たな自分を発見できたり、より広い視野から自分の好き・得意を考えたり、複言語・複文化の強みを生かして将来の選択肢が広がる可能性も
(⇒ 児童生徒がこれらを実感できるように **内容 (話題や活動)** を検討してはどうか)

英語運用能力に関する社会全体の課題と学校教育における対応の方向 (Ver.2)

社会の期待・認識



10年も習ったのに
英語が話せるようにならない...

ギャップを少しでも埋めるためにできることは？

学校で改善できること

コミュニケーション重視の授業
改善を行ってきているが...



ギャップが生まれる背景

授業時間の
制約

卒業後の
学習状況

社会環境・社会の認識

- **必要な学習時間は到達したい水準で異なり、学校教育だけでは時間に限界**
(英語話者が日本語の一般的な専門能力を身につけるために必要な授業時間数は2,200時間※。日本の小中高の外国語の授業時間は600～1,000時間程度。)
- **高校卒業後の伸びが少なく、学習を継続していても具体的な目標設定や学習方略がない場合が多い**
(英語の学び方がわからず、自分の目標との関係で習得すべき語彙や、どのような学習がどれだけ必要なのか意識されていない。関連して、大学教育を通じてでも外国語を使う力が身に付いたと実感できていないとの調査結果も。)
- **英語を頻繁に使わざるを得ない環境がなく、社会全体で切迫感や学習動機が弱い**
(学校で学んだことを学校外で自然に使う機会はほとんどない社会的環境が言語習得の観点で不利であるとの共通認識が必要。AIの発展により、学習動機は更に弱まる可能性。)
- **「英語が話せない」原因は「英語で伝える内容が十分整理されていない」等の場合も**
(自分の意見が母語で十分言語化されていない、国際交流で必須となる自分の国や地域に関する発信型インプットが少ない、自分の考えを伝えるのが苦手)
- **学校英語＝受験英語＝使えない英語との社会の認識**
(コミュニケーション重視の授業改善を図ってきており、大学入試も変わってきているが、効果的な指導法がわからないなど更なる改善の余地。)

学校教育での対応の方向性 (案)

- **目的に応じて多様な到達水準があることや授業時間の限界を踏まえた上で、身に付けたい英語力についての自己イメージを持つことを促してはどうか**
(例: 英語を学ぶ多様な意義の再整理、児童生徒が英語を身に付けたい程度や英語を使用して取り組みたいことについて自己イメージを持つことを意識した活動の充実(キャリア教育との連携を含む) 等)
- **自律的学習者を育てる方向で、授業デザイン・指導方法の改善を図ってはどうか**
(例: 心理的安全性が確保された授業・学校づくり、AIも活用した「恥ずかしがらない」練習量の大幅な増加、AIを活用した児童生徒に応じた教材作成、第二言語習得や学習科学の知見の活用、家庭学習との効果的な連携、継続学習を可能とする学習方略 等)
- **AI時代に英語を学ぶ動機付けを高める機会を授業内外で多層的に充実する観点から、先行事例の成果を共有し、各地方における取組を積極的に推進してはどうか**
(例: 教師・ALT等の連携促進、国内外の英語を使う人との交流、英語キャンプ、海外校との交流、英語での探究、海外留学 等)
※教育委員会と首長部局との連携を含む
- **英語で伝えたい内容を個々の児童生徒が育む活動を充実してはどうか**
(例: AIや学校内外での交流機会を活用しつつ、自分が本当に伝えたいことや自分が生まれ育った国・地域のことを伝える活動の強化、英語に限らない教育課程全体で自分の意見を根拠に基づいて説明する活動の徹底 等)

※ U.S. Department of STATE, FOREIGN SERVICE INSTITUTEのHP (Foreign Language Training - United States Department of State)
なお、英語を母語とする子供は4歳(±17,520時間)までに基本的な文法知識を習得するとされている。
Brown, S., & Larson-Hall, J. (2012). Second language acquisition myths: Applying second language research to classroom teaching. University of Michigan Press ELT.
中田達也. (2023). 最新の第二言語習得研究に基づく「究極の英語学習法」. KADOKAWA.



(参考) 総則・評価特別部会資料



検討項目③

内容の表形式化の具体的な形式

検討項目③ 内容の表形式化の具体的な形式（1）

1. 内容の表形式化を行う趣旨・目的

- 論点整理では、分かりやすく使いやすい学習指導要領の実現を通じて、「主体的・対話的で深い学び」の実装を図る観点から、学習指導要領の内容について、中核的な概念等をもとに表形式で構造化を図る方針を示している
- 具体的には、
 - ①「知・技」「思・判・表」(※1)の深まりの可視化（「タテ」の関係の可視化）、
 - ②「知・技」「思・判・表」の一体的育成の可視化（「ヨコ」の関係の可視化）により、資質・能力の関係性の理解に基づき、それらを一体的に育成する教師の単元づくり(※2)を助け、「深い学び」を授業で具現化しやすくすることを目指すとしている（※1）「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」を指す。以下同じ。
（※2）題材づくりを含む。以下同じ。
- 総則・評価特別部会として、論点整理の趣旨を具現化する表形式での構造化の在り方を検討し、各教科等WGでの検討に資するよう、具体的に示す必要がある

2. 内容の表形式化の具体的な考え方（「並列」パターン）

- 1. で示した趣旨を具体化する表形式を考える際、「タテ」の関係を可視化するには、個別の「知・技」「思・判・表」それぞれについて、児童生徒の中で相互に関連付けられ、構造化されて深い理解や習得に至った際の資質・能力の姿を示すことが重要となる。また、「ヨコ」の関係を可視化するには、「知・技」に対応して一体的に育成を目指す「思・判・表」を並列して記載することが考えられる
- これらを表形式で表現すると、以下のようなイメージが考えられる

中核的な概念の深い理解（仮称） XXXXXXXXXXXXXXXXXX	複雑な課題の解決（仮称） XXXXXXXXXXXXXXXXXX
知識及び技能 ・XXXXXXX ・XXXXXXX	思考力、判断力、表現力等 ・XXXXXXX ・XXXXXXX



- 一方、今回の構造化は、現行の「主体的・対話的で深い学び」の実装を図るものであることから、新たな用語の提起には慎重であるべきとの指摘もあり、現行との連続性を感じられる書きぶりとすることが重要。これを踏まえ、可能な限り現行で既に用いられている言葉を使いつつ構造化を図る観点から、以下のような示し方とすることが考えられないか

知識及び技能に関する 統合的な理解 XXXXXXXXXXXXXXXXXX	思考力、判断力、表現力等の 総合的な発揮 XXXXXXXXXXXXXXXXXX
知識及び技能 ・XXXXXXX ・XXXXXXX	思考力、判断力、表現力等 ・XXXXXXX ・XXXXXXX

検討項目③ 内容の表形式化の具体的な形式(2)

2. 内容の表形式化の具体的な考え方(「並列」パターン)(続き)

- このような示し方をする場合、学年区分の在り方も課題となる。現行では、各教科等の内容は、①学年別に示しているもの、②複数学年別に示しているもの、③指導する学年を示していないものがあり、①及び②については、指定する学年での指導を求めているほか、学年別目標も示している
- この点、上記のような構造化を行った場合、「統合的な理解」「総合的な発揮」にぶら下がる個別の「知・技」等が複数学年にまたがる場合も考えられる。その場合、引き続き学年毎に内容を示すこととすると、同じ「統合的な理解」「総合的な発揮」にぶら下がる資質・能力であっても学年毎に分断して示されることとなり、資質・能力の深まりを体系的に理解することに課題が残る
- また、論点整理では、教科書作成等の観点から引き続き学年区分の一定の記載は必要だが、多様な子供の実態に応じるため学年区分に囚われず柔軟に教育課程の編成・実施が可能であることを明確にすべきとされている



- これらを踏まえ、表形式化に当たっては、学年別に目標を定めて内容を整理することはせず、「統合的な理解」「総合的な発揮」との関係性において内容を整理することとし、指導を想定する学年を明示する場合も、それに囚われず教育課程の編成が可能であることが分かるよう、例えば「○学年相当」という形式で示してはどうか(次頁のイメージ参照)
- こうした指導を想定する学年の記載については、各教科の性質や学校種・発達段階に応じて、1学年毎に示すのが適切と考えられるもの、低・中・高学年など複数学年でまとめて示すのが適切と考えられるもの、示さないことが適切と考えられるものなど様々な場合が考えられるため、柔軟に記載を検討していくことが必要ではないか

表形式による構造化パターン①（並列パターン）

資質・能力の一体的育成の可視化

資質・能力の深まりの可視化

(1) 項目名		
	知識及び技能に関する統合的な理解	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮
	この内容のまとまりを通じて獲得して欲しい統合的な理解等を示す（検討項目④で詳細を検討）	この内容のまとまりにおける知識及び技能を活用しつつ、思考力、判断力、表現力等を総合的に発揮して複雑な課題を解決できる力を示す（検討項目④で詳細を検討）
○学年相当	(小見出し) ・ ・ (小見出し) ・ ・ 右に示す思考・判断・表現の過程で、上に示す統合的な理解を獲得するために必要な要素となる知識及び技能を示す（検討項目⑤で詳細を検討）	(小見出し) ・ ・ (小見出し) ・ ・ 左に示す知識及び技能を活用しながら、上に示す複雑な課題の解決をする上で必要な要素となる思考力、判断力、表現力等を示す（検討項目⑤で詳細を検討）
○学年相当	(小見出し) ・ ・ (小見出し) ・ ・ 知識及び技能に対応する思考力、判断力、表現力等が共通する場合など、分けて示す必要がない場合は、可能な限り繰り返しを避け、セルを統合して示すなど簡素な示し方となるよう工夫する。	
○学年相当	(小見出し) ・ ・ (小見出し) ・ ・	
(内容の取扱い)		

想定する指導学年を明示する場合は、「○学年相当」という形で示す。(示さない場合や、複数学年毎に示す場合、単学年毎に示す場合など柔軟に対応)

検討項目③ 内容の表形式化の具体的な形式 (3)

2. 内容の表形式化の具体的な考え方 (「並行」パターン)

- 「並列」パターンでは、「知・技」に対応して一体的に育成を目指す「思・判・表」を並列して示すことで「ヨコ」の関係を示すこととしている。このパターンは、「知・技」の内容の系統性が明確で、「知・技」の内容のまとまりに対応した固有の「思・判・表」が想定できる教科では具体的にイメージしやすく、「思・判・表」の活動を通じて対応する「知・技」を育成していく学習指導への改善に資することが期待できる

(例) 数学では、関数における「思・判・表」と図形における「思・判・表」は異なるものが想定される

- 一方で、教科によっては、「知・技」よりも「思・判・表」の系統性が明確で、「知・技」の内容のまとまりに対応した固有の「思・判・表」が想定しにくく、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助けるといった構造のものもある

(例) 国語では、漢字・文法・情報の扱い方などの「知・技」に対応した「思・判・表」が明確ではなく、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことといった「思・判・表」のそれぞれの深まりを、「知・技」が全体として支えている構造となっている

- このような教科は、「並列」パターンのように「知・技」に対応した「思・判・表」を並列して見せることの意義は小さい。むしろ下部のイメージのように、「思・判・表」の深まりをまず明確にできるよう列として示し、その深まりを「知・技」が支えながら一体的に育まれていくことを視覚的に示すことにより、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助けることを具体的にイメージしやすく、学習指導への改善に資することが期待できる (次頁イメージ図参照)

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 XXXXXXXXXXXXXXX	1)	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX
	2)	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX
	3)	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX
知識及び技能に関する統合的な理解 XXXXXXXXXXXXXXX	•XXXXXXXX •XXXXXXXX			

表形式による構造化パターン②（並行パターン）

資質・能力の深まりの可視化

		○学年相当	○学年相当	○学年相当
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 知識・技能を活用しつつ、思考力・判断力・表現力等を総合的に発揮して複雑な課題を解決できる力を示す（検討項目④で詳細を検討）	(1) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
	(2) 項目名	(小見出し) ・ ・	下に示す知識及び技能を活用しながら、左に示す複雑な課題の解決をする上で必要な要素となる思考力、判断力、表現力等を示す。 （検討項目⑤で詳細を検討）	
	(3) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
知識及び技能に関する統合的な理解 この内容のまとまりを通じて獲得して欲しい統合的な理解等を示す（検討項目④で詳細を検討）	(1) 項目名	(小見出し) ・ ・	左に示す統合的な理解を獲得し、上に示す思考・判断・表現を豊かにするために必要となる知識及び技能を示す（検討項目⑤で詳細を検討）	
	(2) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
	(3) 項目名	(小見出し) ・ ・	学年相当に分けて示す必要がない場合は、可能な限り繰り返しを避け、セルを統合して示すなど簡素な示し方となるよう工夫する。	
	(4) 項目名	(小見出し) ・ ・		
(内容の取扱い)				

資質・能力の一体的育成の可視化

※表の読み方を示す柱書きや、見出しや各項目の番号の示し方等の平仄については告示の検討に際して技術的に検討

3. 1. 及び 2. を踏まえた今後の対応

- 以上のように、示す要素は同一でもその示し方は以下の2つのパターンが考えられる。各教科等では、2つのパターンから各教科等の特質に応じた学習過程の改善を図る上で、教師にイメージがより掴みやすいと考えられる方を選択し、形式の具体について各教科等WGで検討を深めることとしてはどうか
 - ✓「知・技」の内容のまとまりに対応した「思・判・表」を並列で示す、「並列」パターン
 - ✓「思・判・表」の深まりを「知・技」が支えることを示す、「並行」パターン
- なお、現行でも「知・技」「思・判・表」それぞれごとに内容を示していない、「生活」「特別活動」「道徳」「総合的な学習（探究）の時間」や幼稚園教育要領における内容の示し方については、上記のパターンの考え方を踏まえつつ、それぞれの教科・領域に適した表形式による示し方について、各WGで検討してはどうか
- なお、今回の表形式化は、欄に分けて記載された事項を一体的に、順序立てて見ることで、資質・能力に関する理解が深まり、教師の質の高い授業作りに繋がっていくことを期待して行うものである。したがって、単に見やすさのみを求めたり、表にすることが自己目的化したりすることなく、各教科等の特質に応じた学習過程の改善に繋がるように各WGで検討を深めることが重要。その際、表で端的かつ直感的な理解を保障しつつ、学習過程のデザインが具体的にイメージできるような説明が本文や解説で加えられることにより、より一層立体的な理解が可能になるのではないかと。

4. 「タテ」の関係、「ヨコ」の関係の用語

- こうした考え方を表形式で示す場合、「並列」パターンでは、資質・能力の深まりを上下で、資質・能力の一体的育成の関係を左右で確認できるため、「タテ」「ヨコ」の関係の可視化という言葉がイメージしやすい。一方で、「並行」パターンでは、資質・能力の深まりは左右で、一体的育成の関係は上下で確認することとなるため、「タテ」「ヨコ」という語感とのズレが生じ、分かりにくいとの指摘もある
- このため、「タテ」「ヨコ」の関係の可視化という表現は今後用いず、「資質・能力の深まり」「資質・能力の一体的育成」の可視化といった表現を用いて示していくことが考えられるのではないかと



検討項目④

中核的な概念等

1. 「高次の資質・能力」の可視化の目的

- 検討項目③では表形式での内容の構造化で、
 - ✓ 「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化
(従前の「タテ」の関係の可視化)
 - ✓ 「知・技」「思・判・表」の一体的育成の可視化
(従前の「ヨコ」の関係の可視化)

を図ることにより、資質・能力の関係性の理解に基づき、それらを一体的に育成する単元づくりを助け「深い学び」を具現化しやすくする方策を検討した

- このうち特に、「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」(※以下、総称して「高次の資質・能力」)を示すことについては、「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化を通じて「深い学び」を実現する単元づくりのイメージを教師が持てるようにする役割を担うもの

※論点整理では、「知・技」の深まりを示すものを「中核的な概念の深い理解」、「思・判・表」の深まりを示すものを「複雑な課題の解決」と仮称し、それらをまとめて「中核的な概念等」と呼んでいたが、新たな用語が増えることを避けるため現行でも用いられている言葉を用いることとしたもの。「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」をまとめて呼称する際、以後「高次の資質・能力」と呼ぶこととする。これらの用語の在り方については、各教科等WGでの具体的な議論も踏まえた上で、学校現場に趣旨が適切に伝わるものとなっているかという視点から継続的に検討。

2. 各WGでの検討に当たっての考え方

- こうした役割を果たす「高次の資質・能力」を各WGで具体的に抽出する際、各教科等固有の学習過程の改善を図るためには、教科ごとの特質に応じて検討が行われる必要があります、書きぶりを現時点で一律に整理すべきものではない
- 一方で、各教科等での「高次の資質・能力」は、備えるべき要素や性質等について、一定の共通性があることにより、各教科等を横断して適切に機能を発揮することが期待できる
- 各教科等の独自性を活かしつつ、共通に備えるべき要素や性質等が確保された「高次の資質・能力」の書きぶりとなるよう、次頁のように「高次の資質・能力」がその目的を踏まえたものとなっていることを担保するチェックポイントを示した上で、各教科等WGでの検討を深めてはどうか(次頁参照)
- なお、「全てのポイントに照らして異論の余地のない」ものを検討することは困難な場合も考えられるため、各教科等の授業改善に資する点を重視しつつ検討を進めるべきではないか

「高次の資質・能力」を検討する上でのチェックポイント（案）

【A 教科等の本質的意義の中核に照らした重要性の観点】

- ・目標の達成に資する上で重要であるとともに、各教科等の本質的意義の中核（「見方・考え方」）に照らし適切なものであるといえるか

【B 資質・能力の深まりを示す観点】

- ・要素となる個別の資質・能力の「深まり」を示す事ができているか。具体的には、内容のまとまりを単に要約した「見出し」に留まるのではなく、個別の資質・能力が児童生徒の中で相互に関連付けられて、統合的に獲得された際の姿を示すことができているか
- ・要素となる個別の資質・能力を学ぶことの意義（※）や、それを広く社会において、いつ、どのような文脈で活用することができるのか、を教師がイメージしやすいものとなっているか

（※）学ぶことの「意義」は必ずしも実生活における実用的な側面にとどまらない点に留意

【C 深い学びを実現する単元づくりを助ける観点】

- ・教師が単元構想時に、「知識及び技能の統合的な理解」と、それにぶら下がる個別の「知・技」、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、単元を通じて児童生徒が追究する本質的な「問い」を構想する上で参考になるか
- ・教師が単元構想時に、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、論述・レポート・発表・作品製作等、単元を通じて児童生徒が資質・能力を統合的に発揮しながら取り組む課題を構想する上で参考になるか

【D 分かりやすさ等の観点】

- ・経験の浅い教師も含めて、一人一人の教師にとって、分かりやすく、使いやすいことに加え、教科等の面白さや魅力が伝わる文言となっているか（学習・指導を通じて、最終的には児童生徒自身が掴むことができる必要があるという点も留意）
- ・学校種・学年等、発達段階に即して妥当なものとなっているか（系統性等の重視により、発達段階に照らし過度に抽象的となっていないか等）



検討項目⑤

中核的な概念等を踏まえた個別の内容の選択・精選

検討項目⑤ 中核的な概念等を踏まえた個別の内容の選択・精選(1)

1. 「高次の資質・能力」を踏まえた内容検討の必要性

【検討項目④との関係】

- 検討項目④では、「高次の資質・能力」により構造化を図ることで、「深い学び」を実現する単元づくりのイメージを教師が持てるようにする方策について検討を行った
- この「高次の資質・能力」による内容の構造化は、「深い学び」の実装に向けた授業づくりを支え、学習過程の改善に資するとともに、学習指導要領等に示す個別の学習内容について、「各教科等の本質的な理解の獲得を重視する観点から真に必要なものか」という視点から見直す大きな契機となる

【論点整理で示されたこと】

- 論点整理においても、構造化に当たり「各教科等の本質的な理解の獲得に重点を置き、学校段階や教科等の特性を踏まえつつ、そのために必要な学習内容を検討したり、必要に応じた精選を行ったりしていくことが必要である」と示している
- また、教科の主たる教材として学習指導に重要な役割を果たす教科書についても、「学習指導要領の構造化の考え方を踏まえ、教科書の内容は教科等の中核的な概念等を掴みやすいものに精選する」という方向性を示している



- こうした学習指導要領等に示す内容の検討と必要に応じた精選、それに伴う教科書の精選の在り方について、各WGの検討に先立ち、基本的な考え方を整理する必要

検討項目⑤ 中核的な概念等を踏まえた個別の内容の選択・精選(2)

2. 各WGにおける検討に当たっての基本的な考え方

- 「高次の資質・能力」については、①各教科等の本質的な意義や背景にある学問的な系統性から演繹的に導かれる側面と、②既にある個別の学習内容をより深く習得するために帰納的に導かれる側面の2つの側面があると考えられる
- このため、具体的な検討に当たっては、①教科等の本質的な意義や系統性に照らした妥当性の観点と、②個別の資質・能力に照らした妥当性の両面を勘案しながら、最終的には、教師にとって分かりやすく、使いやすいことに加え、教科等の面白さや魅力が伝わるものとしていく必要があるのではないか
- このような視点から、各WG等の議論や提示資料の作成に際しては、
 - 「高次の資質・能力」の全体を整理していく作業
 - 整理した「高次の資質・能力」に基づき、より豊かな学習活動に繋がり、かつ、系統性等を損なわない範囲で、精選が可能な対象を慎重に特定しつつ、個別の資質・能力の整理を検討する作業
 - 整理した個別の資質・能力を踏まえて、「高次の資質・能力」を精査する作業を往還しながら、「高次の資質・能力」と個別の資質・能力のそれぞれを洗練させていくことが必要ではないか



- こうしたプロセスで資質・能力の在り方を検討しつつ、それらを表形式で構造化して示すことで、当該教科固有の学習過程の改善に繋げていく上では、学習内容のみならず、主たる教材である教科書の改善も重要。したがって、各WGでは、検定教科書制度の下で民間の教科書発行者が著作・編集することを前提としつつ、「高次の資質・能力」を掴みやすい教科書の在り方についても一定の検討を行う必要があるのではないか
- なお、総則・評価特別部会及び教育課程企画特別部会は、構造化の趣旨の適切な実現の観点から必要な調整を図るとともに、標準授業時数（小中学校）や標準単位数（高校）の検討の基礎とするため、こうした各教科等のプロセスの進捗を確認しながら、必要な調整を図るべきではないか

検討項目⑤ 中核的な概念等を踏まえた個別の内容の選択・精選(3)

3. 今後の検討の進め方(案)

- 2. に示した基本的な考え方を踏まえ、今後の検討を以下の通り進めることについてどのように考えるか。

(1)各教科等の目標と「高次の資質・能力」のたたき台の暫定的な整理 (1月中を目途)

- ・各教科等WGにおいて、全教科等・科目について、目標及び見方・考え方、「高次の資質・能力」全体の一覧を修正の余地のあるたたき台として整理
※高等学校の専門教科・科目については科目数が非常に多いため柔軟に対応

(2)総則・評価特別部会及び教育課程企画特別部会における調整① (2月中を目途)

- ・総則・評価特別部会及び教育課程企画特別部会において、(1)で作成した一覧について議論を行い、論点整理の趣旨の実現の観点から必要な調整等について各WGに共有

(3)個別の資質・能力の検討と「高次の資質・能力」の精査 (3月中を目途)

- ・各教科等WGにおいて、整理した「高次の資質・能力」に基づき、より豊かな学習活動に繋がり、かつ、系統性等を損なわない範囲で、精選が可能な対象を慎重に特定しつつ、個別の資質・能力の整理を検討する。その際、表形式での示し方、「高次の資質・能力」の獲得に向けて「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るための余白が十分にあるかといった視点からも検討
- ・整理した個別の資質・能力の在り方を踏まえて、「高次の資質・能力」の妥当性を精査し、必要に応じた修正を行う
- ・併せて、「高次の資質・能力」を掴みやすい当該教科等の教科書の在り方について、内容の精選の在り方も含めて検討を行う

(4)総則・評価特別部会及び教育課程企画特別部会における調整② (時期は進捗に応じ検討)

- ・総則・評価特別部会及び教育課程企画特別部会において(3)のプロセスで修正した「高次の資質・能力」全体の一覧や、当該教科等における表形式による構造化の在り方の議論を行い、論点整理の趣旨の実現の観点から必要な調整等について各WGに共有

(5)各教科等WG、総則・評価特別部会における最終調整 (時期は進捗に応じ検討)

- ・総則・評価特別部会及び教育課程企画特別部会での議論などを踏まえ、WGでのまとめに向けた検討を実施
- ・総則・評価特別部会においては、各教科等WGの検討状況を踏まえつつ、各教科等の標準授業時数や標準単位数の在り方を踏まえたまとめの検討



参考資料・データ

		普通科等				専門学科				総合 学科
		1 年次	2 年次	3 年次	単位制	1 年次	2 年次	3 年次	単位制	
外国語	英語コミュニケーションⅠ	95.2%	0.9%	0.6%	12.3%	95.8%	11.4%	1.0%	5.2%	100%
	英語コミュニケーションⅡ	0.9%	94.6%	16.2%	11.7%	0.0%	79.2%	50.8%	4.9%	96.5%
	英語コミュニケーションⅢ	0.3%	0.9%	86.8%	11.7%	0.0%	0.0%	28.7%	2.9%	67.8%
	論理・表現Ⅰ	81.1%	11.4%	7.5%	11.7%	23.1%	18.2%	31.9%	3.3%	90.1%
	論理・表現Ⅱ	0.0%	74.8%	21.6%	10.5%	0.0%	17.3%	13.4%	2.0%	70.2%
	論理・表現Ⅲ	0.6%	0.0%	61.3%	7.2%	0.0%	0.0%	13.4%	1.6%	22.8%

（出典）文部科学省調べ

※本調査については、学校及び教育委員会の負担軽減の観点から、学校単位での全国的な取組状況を把握することができる規模での抽出調査（文部科学省において無作為抽出）とし、全国の公立高等学校及び中等教育学校後期課程から無作為抽出し実施した。

※調査対象とした学校数は、「普通科等」330校、「専門学科」319校、「総合学科」174校である。

※複数の課程・学科を対象としている学校については、対象となる課程・学科ごとに計上している。

※「普通科等」とは、普通教育を主とする学科を指す。

※令和7年度入学者を対象とした状況について取りまとめている。

※調査対象学校数には、令和7年度入学者がいない学校も含まれている。

【参考】旧高等学校学習指導要領における各科目と目標

平成11年3月告示	オーラル・コミュニケーションⅠ	日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
	オーラル・コミュニケーションⅡ	幅広い話題について、情報や考えなどを整理して英語で発表したり、話し合ったりする能力を伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
	英語Ⅰ	日常的な話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
	英語Ⅱ	幅広い話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える能力を更に伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
	リーディング	英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解する能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
	ライティング	情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

平成21年3月告示	コミュニケーション英語基礎	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの基礎的な能力を養う。
	コミュニケーション英語Ⅰ	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う。
	コミュニケーション英語Ⅱ	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を伸ばす。
	コミュニケーション英語Ⅲ	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を更に伸ばし、社会生活において活用できるようにする。
	英語表現Ⅰ	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う。
	英語表現Ⅱ	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばす。
	英語会話	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、身近な話題について会話する能力を養う。

英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、聞くこと、読むこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くことの五つの領域（以下この節において「五つの領域」という。）別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1款の（1）及び（2）に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1款の（3）に示す資質・能力を育成する。

(1)聞くこと	<p>ア 日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、話し手の意図を把握することができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができるようにする。</p>
(2)読むこと	<p>ア 日常的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を読み取り、書き手の意図を把握することができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を読み取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができるようにする。</p>
(3)話すこと 〔やり取り〕	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合うやり取りを続けることができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝え合うことができるようにする。</p>
(4)話すこと 〔発表〕	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができるようにする。</p>
(5)書くこと	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができるようにする。</p>

英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、五つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1款の（1）及び（2）に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1款の（3）に示す資質・能力を育成する。

(1)聞くこと	<p>ア 日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、話の展開や話し手の意図を把握することができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができるようにする。</p>
(2)読むこと	<p>ア 日常的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を読み取り、文章の展開や書き手の意図を把握することができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を読み取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができるようにする。</p>
(3)話すこと [やり取り]	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、一定の支援を活用すれば、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを詳しく話して伝え合うやり取りを続けることができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、一定の支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝え合うことができるようにする。</p>
(4)話すこと [発表]	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝えることができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝えることができるようにする。</p>
(5)書くこと	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。</p>

【参考】 現行高等学校学習指導要領（平成30年3月告示）における各科目の領域別目標

英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、五つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1款の（1）及び（2）に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1款の（3）に示す資質・能力を育成する。

(1)聞くこと	ア 日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、必要な情報を聞き取り、話の展開や話し手の意図を把握することができるようにする。
	イ 社会的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、話の展開に注意しながら必要な情報を聞き取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができるようにする。
(2)読むこと	ア 日常的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、必要な情報を読み取り、文章の展開や書き手の意図を把握することができるようにする。
	イ 社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、文章の展開に注意しながら必要な情報を読み取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができるようにする。
(3)話すこと [やり取り]	ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、気持ちなどを詳しく話して伝え合うやり取りを続け、会話を発展させることができるようにする。
	イ 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、聞いたり読んだりしたことを基に、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、課題の解決策などを論理的に詳しく話して伝え合うことができるようにする。
(4)話すこと [発表]	ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、気持ちなどを論理的に詳しく話して伝えることができるようにする。
	イ 社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、聞いたり読んだりしたことを基に、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、気持ちなどを論理的に詳しく話して伝えることができるようにする。
(5)書くこと	ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、気持ちなどを複数の段落から成る文章で論理的に詳しく書いて伝えることができるようにする。
	イ 社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、聞いたり読んだりしたことを基に、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、気持ちなどを複数の段落から成る文章で論理的に詳しく書いて伝えることができるようにする。

英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くことの三つの領域（以下この節において「三つの領域」という。）別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1款の（1）及び（2）に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1款の（3）に示す資質・能力を育成する。

(1)話すこと 〔やり取り〕	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合ったり、やり取りを通して必要な情報を得たりすることができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、ディベートやディスカッションなどの活動を通して、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、基本的な語句や文を用いて、意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して話して伝え合うことができるようにする。</p>
(2)話すこと 〔発表〕	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理の構成や展開を工夫して話して伝えることができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、スピーチやプレゼンテーションなどの活動を通して、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、基本的な語句や文を用いて、意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して話して伝えることができるようにする。</p>
(3)書くこと	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理の構成や展開を工夫して文章を書いて伝えることができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、基本的な語句や文を用いて、意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して文章を書いて伝えることができるようにする。</p>

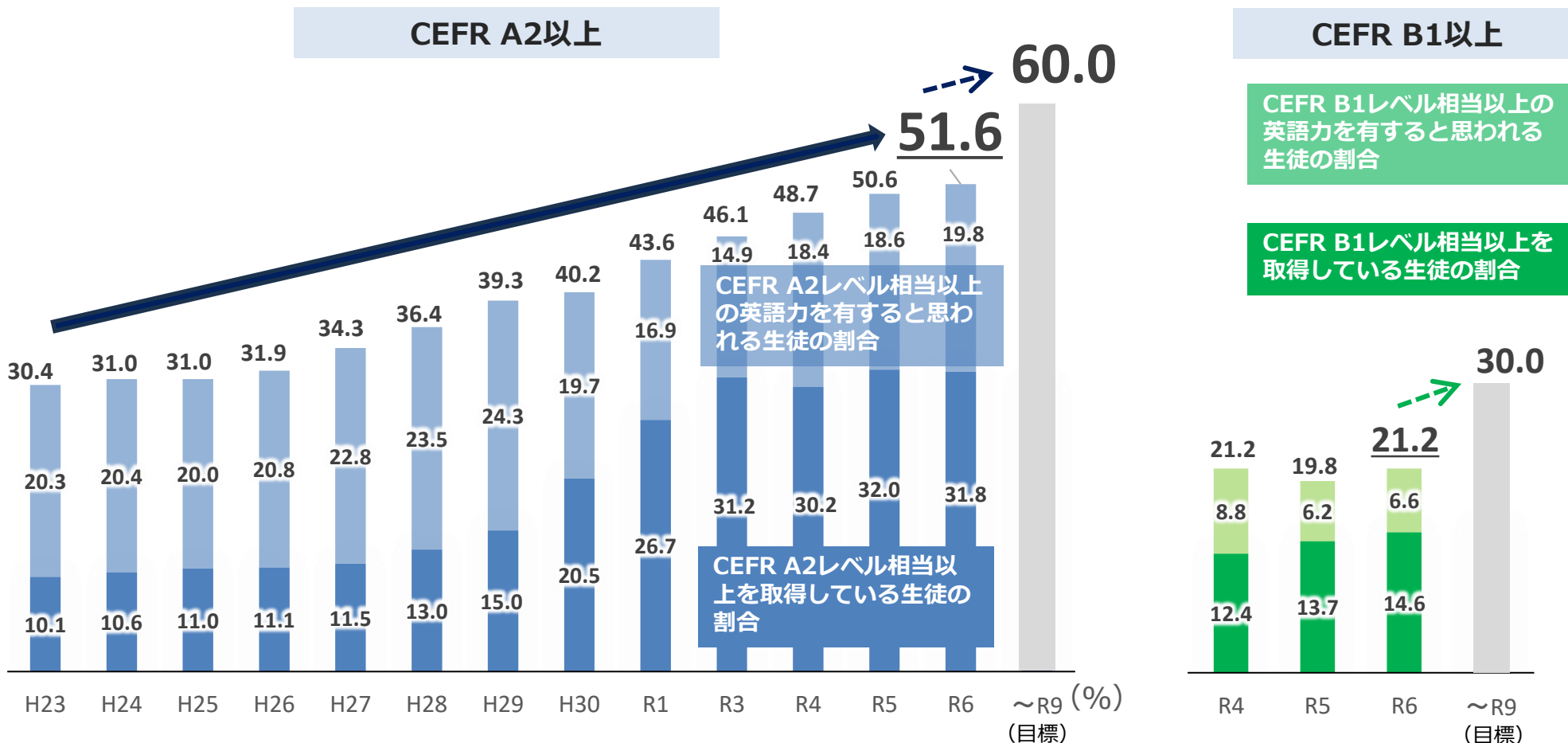
英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、三つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1款の（1）及び（2）に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1款の（3）に示す資質・能力を育成する。

<p>(1)話すこと [やり取り]</p>	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、一定の支援を活用すれば、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを詳しく話して伝え合ったり、立場や状況が異なる相手と交渉したりすることができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、一定の支援を活用すれば、ディベートやディスカッションなどの活動を通して、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、多様な語句や文を用いて、意見や主張、課題の解決などを論理の構成や展開を工夫して詳しく話して伝え合うことができるようにする。</p>
<p>(2)話すこと [発表]</p>	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理の構成や展開を工夫して詳しく話して伝えることができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、スピーチやプレゼンテーションなどの活動を通して、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、多様な語句や文を用いて、意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して詳しく話して伝えることができるようにする。</p>
<p>(3)書くこと</p>	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、多様な語句や文を用いて、意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。</p>

英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、三つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1款の（1）及び（2）に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1款の（3）に示す資質・能力を育成する。

<p>(1)話すこと [やり取り]</p>	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、複数の資料を活用しながら、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、課題を解決することができるよう、情報や考え、気持ちなどを整理して話して伝え合うことができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、ディベートやディスカッションなどの活動を通して、複数の資料を活用しながら、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、意見や主張、課題の解決策などを、聞き手を説得できるよう、論理の構成や展開を工夫して詳しく話して伝え合うことができるようにする。</p>
<p>(2)話すこと [発表]</p>	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、気持ちなどを、聞き手を説得できるよう、論理の構成や展開を工夫して詳しく話して伝えることができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、スピーチやプレゼンテーションなどの活動を通して、複数の資料を活用しながら、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、意見や主張などを、聞き手を説得できるよう、論理の構成や展開を工夫して詳しく話して伝えることができるようにする。</p>
<p>(3)書くこと</p>	<p>ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、気持ちなどを、読み手を説得できるよう、論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、複数の資料を活用しながら、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、意見や主張などを、読み手を説得できるよう、論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。</p>

- CEFR A2レベル相当以上を達成した高校生の割合は**51.6%**で増加
- CEFR B1レベル相当以上を達成した高校生の割合は**21.2%**で増加



※「第4期教育振興基本計画」(R5~R9)では、高等学校卒業段階でCEFR A2レベル相当以上を達成した高校生の割合6割以上、CEFR B1レベル相当以上を達成した高校生の割合3割以上を目標としている。

※CEFR A2:英検準2級、B1:英検2級相当

※「CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒」とは、実際に外部検定試験の級、スコア等を取得していないが、2技能又は3技能を測る試験におけるスコア、公式な記録としては認定されない試験のスコア、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果、各教育委員会でモデル校での検証に基づいて定めた目安等により、それに相当する英語力を有していると英語担当教師が判断する生徒を指す。

※CEFR A2/B1レベル相当以上を有するかどうかを判断する際に活用した根拠(複数回答可): 2技能又は3技能を測る試験におけるスコア47.4%、公式な記録としては認定されない試験のスコア16.1%、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果45.0%、MEXCBTに搭載しているCBT問題の解答状況0.3%、AIツール等による英語力の判定結果1.2%、その他21.6%

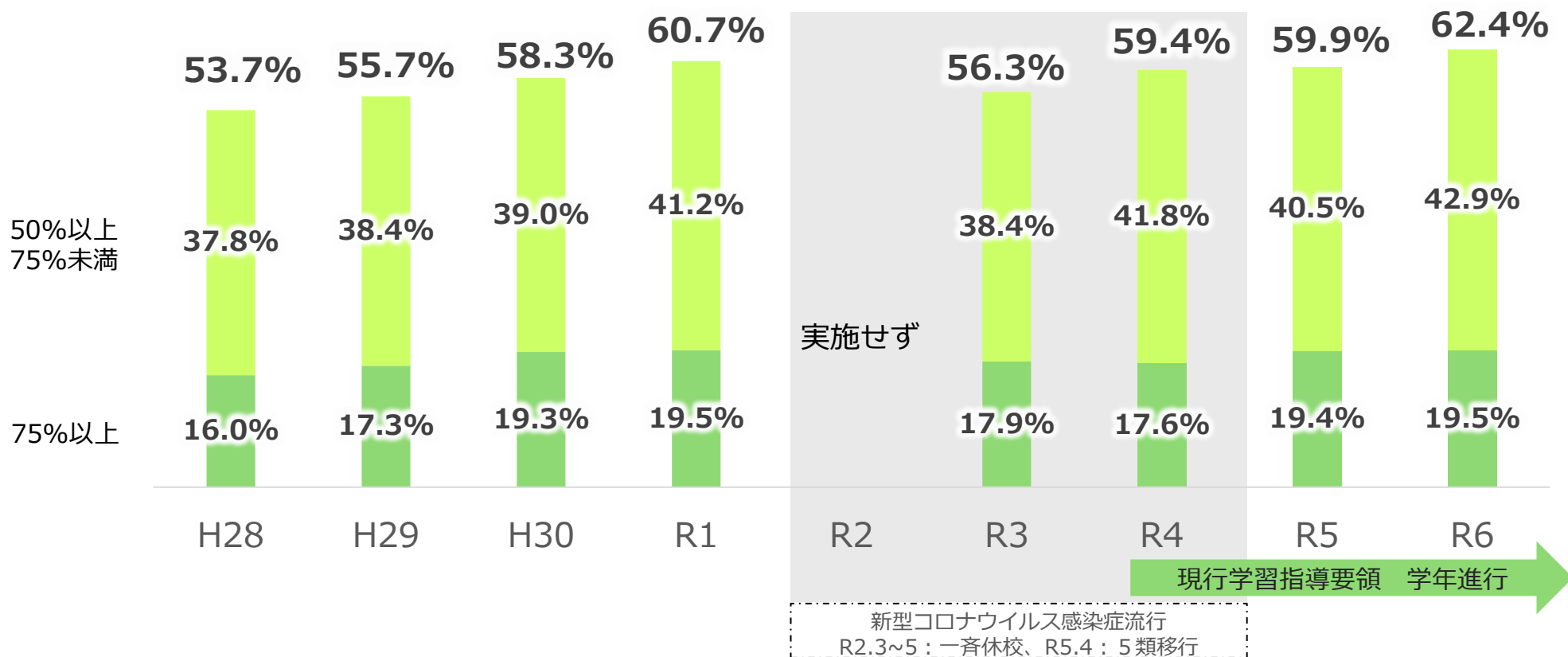
※上のグラフでは、高等学校第3学年の生徒に占める割合を算出している。

※H23・H24の数値は「『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査」に基づく。

生徒の英語による言語活動時間の割合

(コミュニケーション英語Ⅰ、英語コミュニケーションⅠ)

【普通科+その他の専門学科及び総合学科】



※調査対象は公立高等学校及び中等教育学校の後期課程（定時制及び通信制の課程は対象外。R4より特別支援学校は対象外である旨、明示）

※R3までは担当教員ごとに、R4からは学科単位で回答。H28~30は臨時的任用の者、非常勤講師は除くとの指示あり。

※調査基準日は12月1日現在

※R4までは1単位時間の授業に占める割合、R5からは1年間の授業を通して占める割合を回答。

※「言語活動」に関する項目に記載の定義について、調査年度により具体例は異なっている。

※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」

※現行CSの年次進行のため、R4は高1について、R5は高1・2について回答。

※割合の合計は、小数点第2位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

言語活動中心の授業に一定の進捗 (英語コミュニケーション I)

教師への調査では、言語活動の状況について**肯定的な回答の割合が高く、言語活動中心の授業が実施されている傾向にある**といえる

Q

コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を設定し、それらを生徒が理解し、外国語で表現し伝え合うことを大切にしている

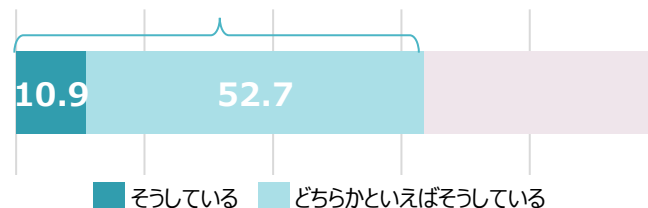
79.9%



Q

生徒の英語による言語活動が授業の中心となるようにしている

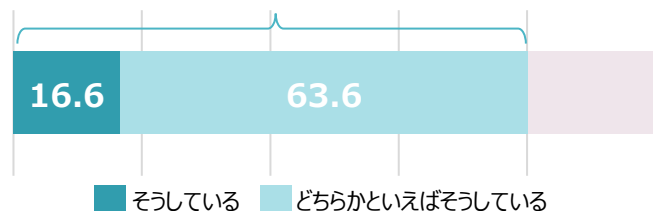
63.6%



Q

外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を行っている

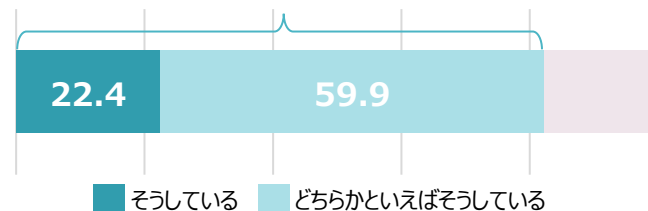
80.2%



Q

文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ用語や用法の区別などが指導の中心とならないように配慮し、実際に活用できるよう言語活動と効果的に関連付けて指導している

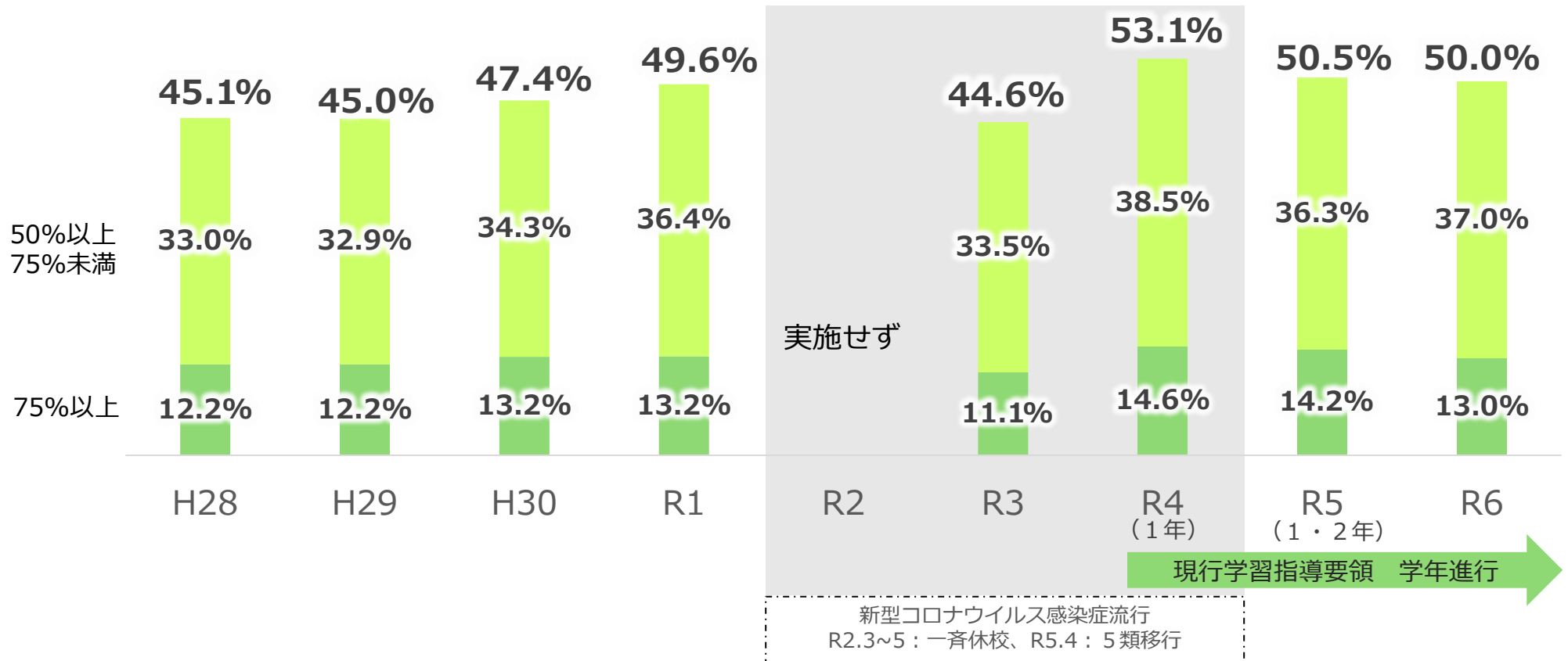
82.3%



生徒の英語による言語活動時間の割合

(英語表現Ⅰ、論理・表現Ⅰ)

【普通科+その他の専門学科及び総合学科】



※調査対象は公立高等学校及び中等教育学校の後期課程（定時制及び通信制の課程は対象外。R4より特別支援学校は対象外である旨、明示）

※R3までは担当教員ごとに、R4からは学科単位で回答。H28~30は臨時的任用の者、非常勤講師は除くとの指示あり。

※調査基準日は12月1日現在

※R4までは1単位時間の授業に占める割合、R5からは1年間の授業を通して占める割合を回答。

※「言語活動」に関する項目に記載の定義について、調査年度により具体例は異なっている。

※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、

R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」

※現行CSの年次進行のため、R4は高1について、R5は高1・2について回答。

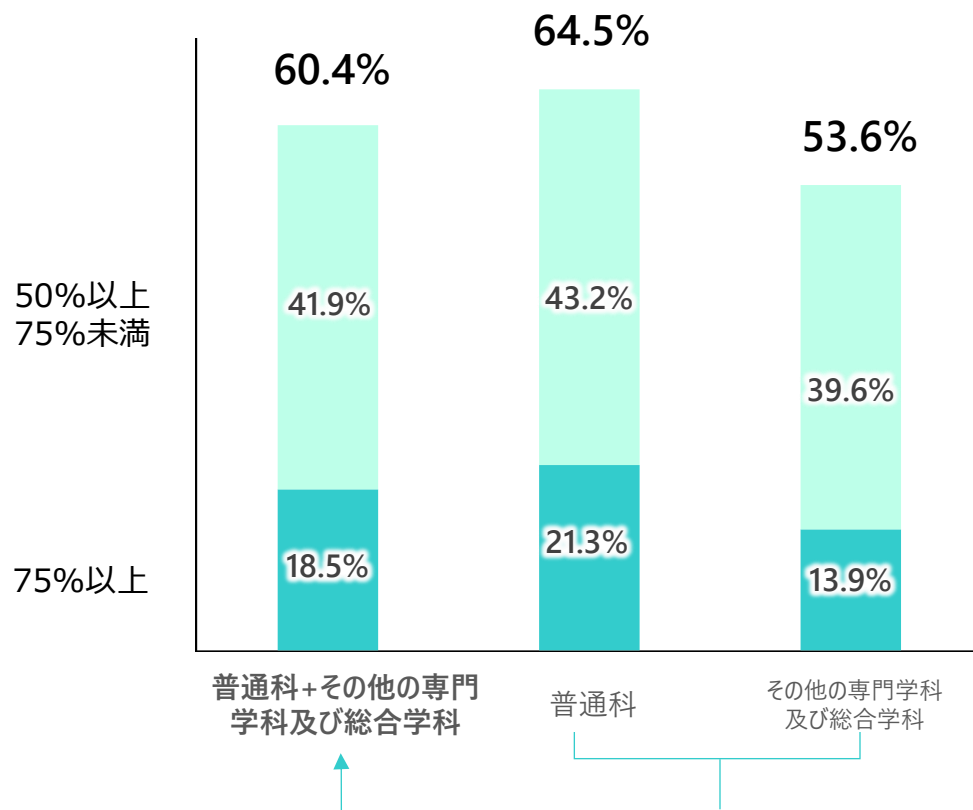
※割合の合計は、小数点第2位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

英語コミュニケーションと比べ、論理・表現での言語活動が少ない傾向

英語コミュニケーション

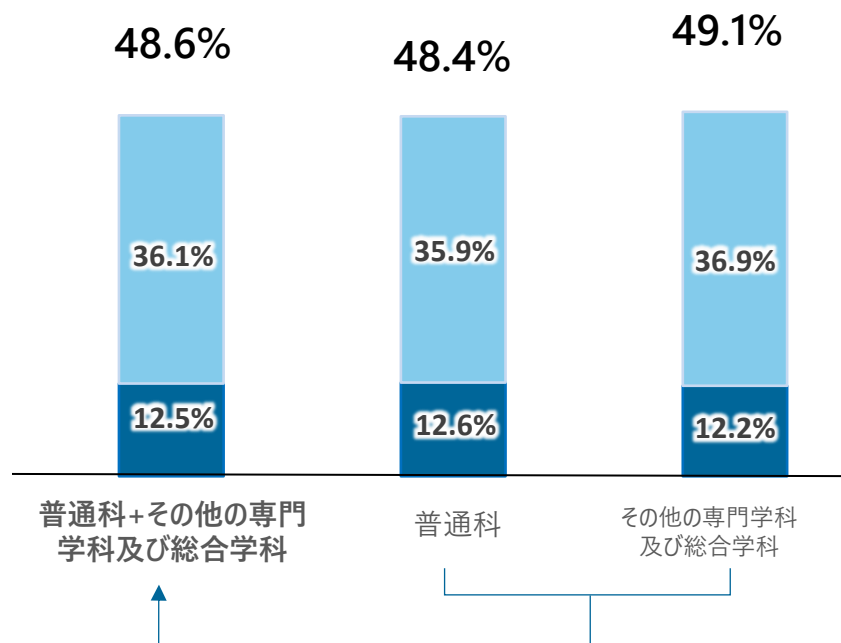
5領域を総合的に扱う科目群

(授業中の言語活動の割合)



論理・表現

ディベートやディスカッション等を通して
発信力を高める科目群



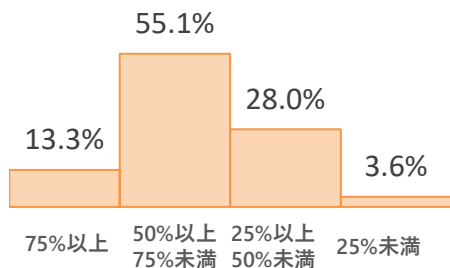
※ 【英語コミュニケーション】は英語コミュニケーションⅠ～Ⅲ、【論理・表現】は論理・表現Ⅰ～Ⅲの回答を合算して集計している。

(出典) 令和6年度英語教育実施状況調査より作成。

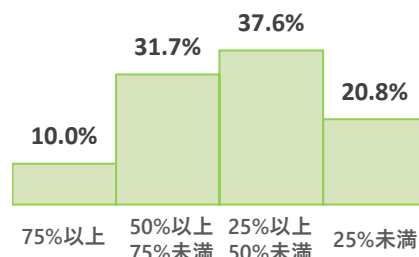
教師の英語使用状況

- 中学校では、約 7 割の学校で英語担当教師が発話の半分以上を英語で行っている
 - 高等学校では、約 4 割の学校で英語担当教師が発話の半分以上を英語で行っている
(ただし、英語教育を主とする学科及び国際関係に関する学科では約 8 割)
- 英語コミュニケーションと比べ、論理・表現では英語による発話の割合が少ない傾向**

中学校（全体）※1

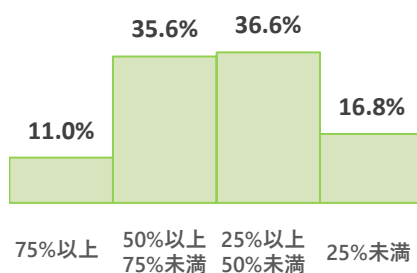


高校（全体）

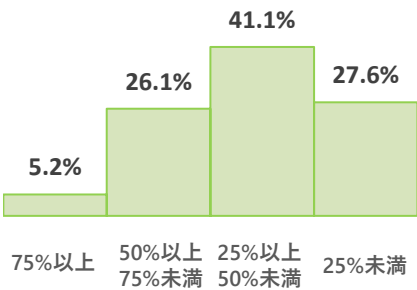


【科目別】※2

英語コミュニケーション

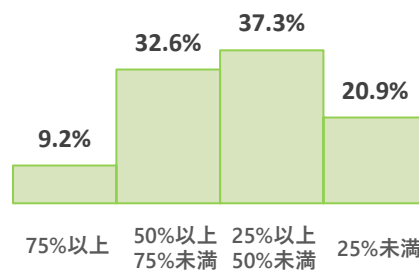


論理・表現

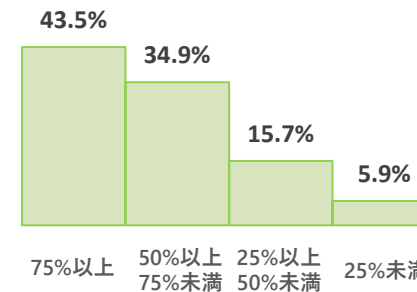


【学科別】

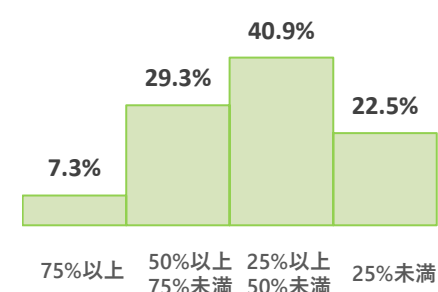
普通科



英語教育を主とする学科 及び国際関係に関する学科



その他の専門学科 及び総合学科



※1 中学校はR 5 調査、高校はR 6 調査。ここでの「教師」とは、調査基準日時点において英語の授業を担当している者（臨時的任用の者及び非常勤講師も含む。）

※2 【英語コミュニケーション】は英語コミュニケーションⅠ～Ⅲ、【論理・表現】は論理・表現Ⅰ～Ⅲの回答を合算して集計している。

なお、対象学科は「普通科」と「その他の専門学科及び総合学科」とし、「英語教育を主とする学科及び国際関係に関する学科」は含んでいない。

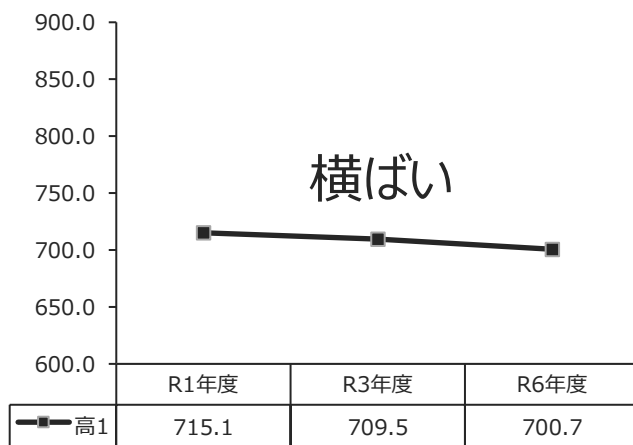
（出典）令和 5 年度及び令和 6 年度英語教育実施状況調査より作成。

高校の全体傾向（4技能総合スコア）

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、R1、R3、R6年度におけるGTECの結果等を分析したもの。詳細は参考資料12を参照。

4技能総合 全国平均スコア

高1

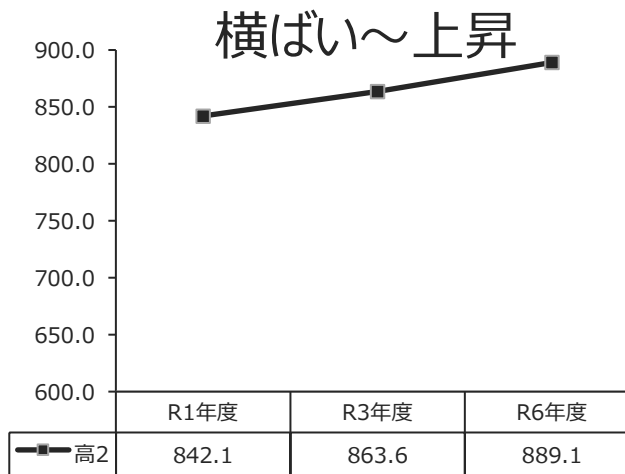


※ η^2 : 0.002

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.1	A2.1	A2.1

※標準偏差：R1は136.4、R3は138.9、R6は145.3。

高2



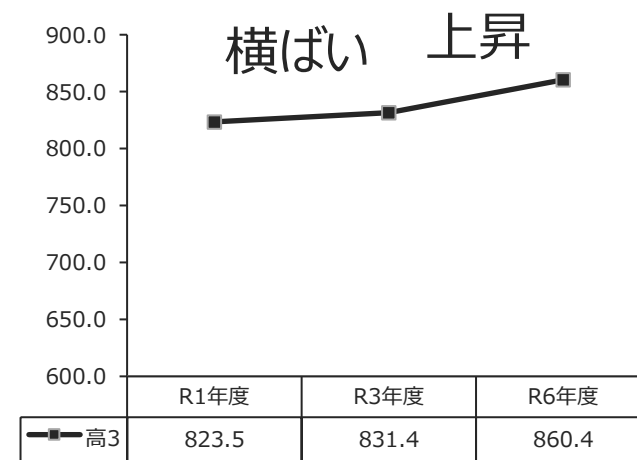
※ η^2 : 0.018

※Cohen's d : R1-R3 -0.154 ; R3-R6 -0.186

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差：R1は138.6、R3は129.6、R6は149.7。

高3



※ η^2 : 0.013

※Cohen's d : R1-R3 -0.059 ; R3-R6 -0.204

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差：R1は134.0、R3は136.8、R6は147.0。

スコア680～929：CEFR A2、スコア680～809：CEFR-J A2.1、スコア810～929：CEFR-J A2.2

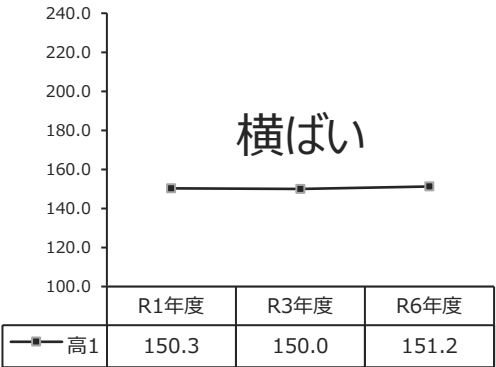
※「4技能」の表記について、本調査は旧CS下の生徒も対象としているため、「4技能・5領域」と表記していません。

※集団属性情報【高校】：学校実施の受検データであり学年全体のデータが基本／公立高校が約6割、私立高校が約4割を占める／4年制大学に進学する生徒が約9割以上の学校の生徒が約8割を占める／首都圏・近畿の受検者が約5割を占める。

高1 経年比較 4 技能別の傾向

各技能 全国平均スコア

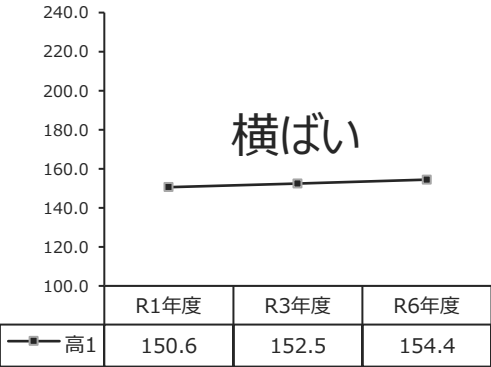
聞くこと Listening



※ η^2 : 0.000

平均 CEFR	A1	A1	A1
平均 CEFR-J	A1.3	A1.3	A1.3

読むこと Reading

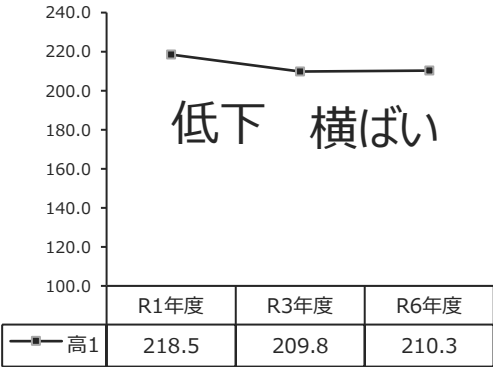


※ η^2 : 0.001

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.1	A2.1	A2.1

※標準偏差 : R1は39.0、R3は39.7、R6は41.2。

話すこと Speaking

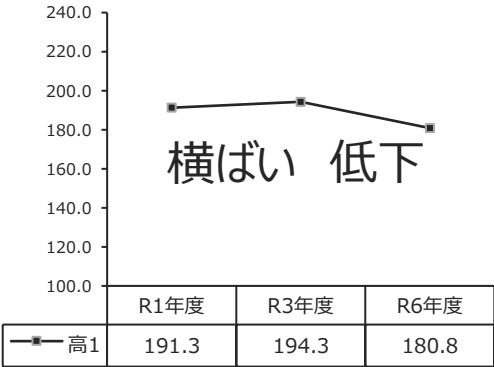


※ η^2 : 0.012
※Cohen's d : R1-R3 0.229 ; R3-R6 -0.012

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.1	A2.1	A2.1

※標準偏差 : R1は39.9、R3は36.9、R6は38.0。

書くこと Writing



※ η^2 : 0.015
※Cohen's d : R1-R3 -0.068 ; R3-R6 0.301

平均 CEFR	A2	A2	A1
平均 CEFR-J	A2.1	A2.1	A1.3

※標準偏差 : R1は43.9、R3は41.9、R6は48.7。

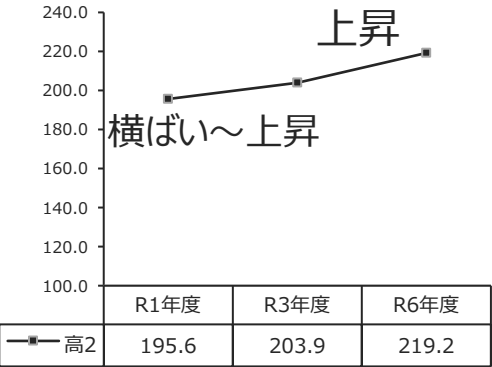
Listeningスコア70～159 : CEFR A1、スコア130～159 : CEFR-J A1.3
Readingスコア150～219 : CEFR A2、スコア150～179 : CEFR-J A2.1
Speakingスコア180～259 : CEFR A2、スコア180～229 : CEFR-J A2.1
Writingスコア70～189 : CEFR A1、スコア190～229 : CEFR A2、スコア140～189 : CEFR-J A1.3、スコア190～209 : CEFR-J A2.1

※「4 技能」の表記について、本調査は旧CS下の生徒も対象としているため、「4 技能・5 領域」と表記していません。
※集団属性情報【高校】：学校実施の受検データであり学年全体のデータが基本／公立高校が約6割、私立高校が約4割を占める／4 年制大学に進学する生徒が約 9 割以上の学校の生徒が約 8 割を占める／首都圏・近畿の受検者が約5割を占める。

高2 経年比較 4 技能別の傾向

各技能 全国平均スコア

聞くこと Listening

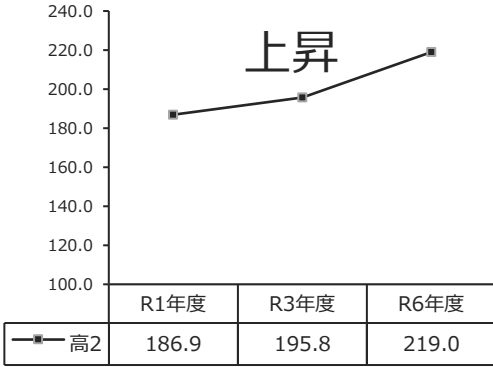


※ η^2 : 0.036
※Cohen's d : R1-R3 -0.170 ; R3-R6 -0.299

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は45.7、R3は48.7、R6は52.4。

読むこと Reading

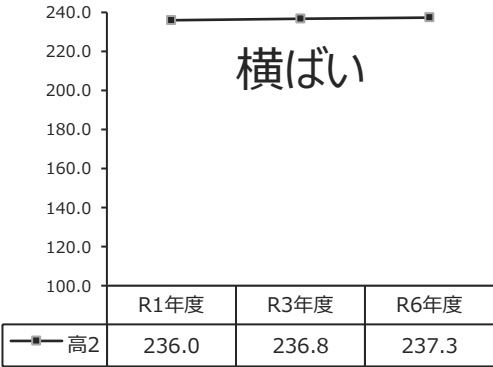


※ η^2 : 0.097

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は37.3、R3は37.9、R6は45.9。

話すこと Speaking

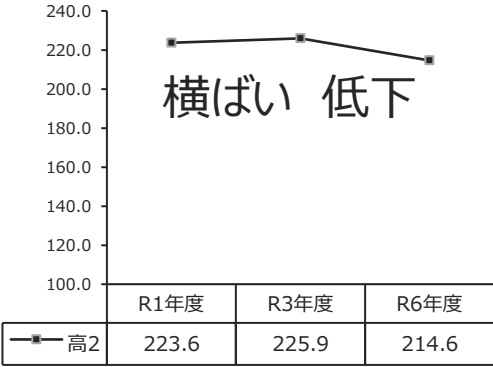


※ η^2 : 0.000

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は42.0、R3は36.3、R6は33.1。

書くこと Writing



※ η^2 : 0.015
※Cohen's d : R1-R3 -0.055 ; R3-R6 0.287

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は41.6、R3は34.7、R6は45.9。

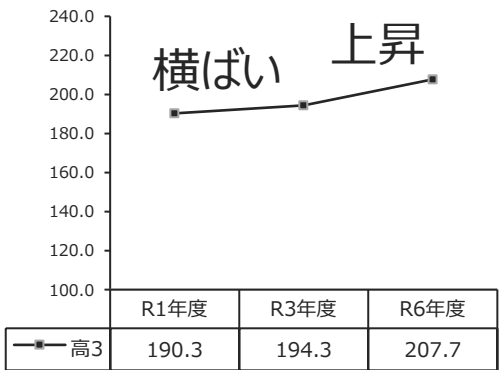
Listeningスコア160～219 : CEFR A2、スコア190～219 : CEFR-J A2.2
Readingスコア150～219 : CEFR A2、スコア180～219 : CEFR-J A2.2
Speakingスコア180～259 : CEFR A2、スコア230～259 : CEFR-J A2.2
Writingスコア190～229 : CEFR A2、スコア210～229 : CEFR-J A2.2

※「4 技能」の表記について、本調査は旧CS下の生徒も対象としているため、「4 技能・5 領域」と表記していません。
※集団属性情報【高校】 : 学校実施の受検データであり学年全体のデータが基本 / 公立高校が約6割、私立高校が約4割を占める / 4 年制大学に進学する生徒が約9 割以上の学校の生徒が約8 割を占める / 首都圏・近畿の受検者が約5割を占める。

高3 経年比較 4 技能別の傾向

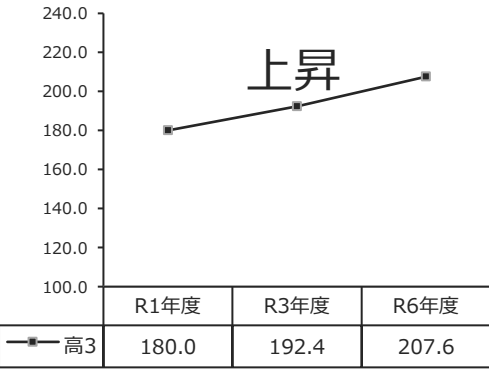
各技能 全国平均スコア

聞くこと Listening



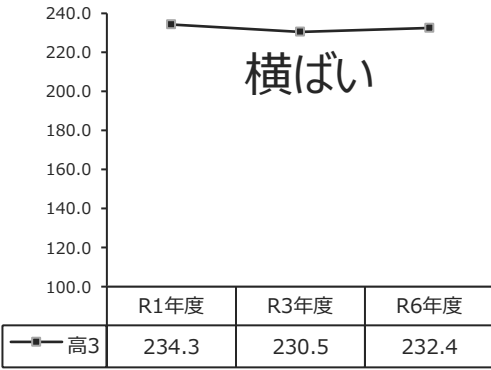
※ η^2 : 0.026
※Cohen's d : R1-R3 -0.092 ; R3-R6 -0.280

読むこと Reading



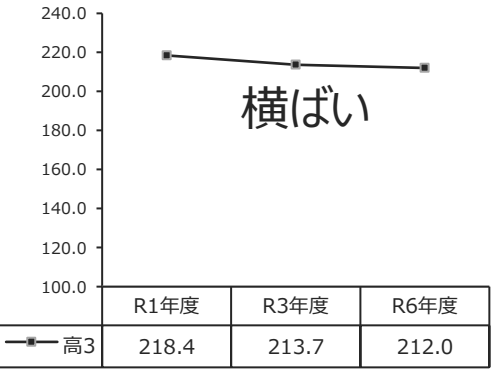
※ η^2 : 0.081
※Cohen's d : R1-R3 -0.357 ; R3-R6 -0.376

話すこと Speaking



※ η^2 : 0.001

書くこと Writing



※ η^2 : 0.004

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は42.2、R3は45.6、R6は49.8。

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は31.9、R3は36.7、R6は43.7。

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は42.3、R3は40.6、R6は37.4。

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は44.1、R3は37.6、R6は43.4。

Listeningスコア160～219 : CEFR A2、スコア190～219 : CEFR-J A2.2
Readingスコア150～219 : CEFR A2、スコア180～219 : CEFR-J A2.2
Speakingスコア180～259 : CEFR A2、スコア230～259 : CEFR-J A2.2
Writingスコア190～229 : CEFR A2、スコア210～229 : CEFR-J A2.2

※「4 技能」の表記について、本調査は旧CS下の生徒も対象としているため、「4 技能・5 領域」と表記していません。
※集団属性情報【高校】：学校実施の受検データであり学年全体のデータが基本／公立高校が約6割、私立高校が約4割を占める／4 年制大学に進学する生徒が約9割以上の学校の生徒が約8割を占める／首都圏・近畿の受検者が約5割を占める。

問題概要

会話文の中で空欄に当てはまるべき**内容を考え、与えられた動詞を活用して適切な文法事項を用いて表現する**問題

通過率

該当する3問のうち、
最も高い問題でも約3割程度

問題概要

日常的な話題について、目的や場面、状況に応じて、**自分の意見とその理由に具体例や説明を含めて書く**問題

通過率

問題a9 **20.1%**

問題概要

オンライン・ディスカッションにおいて、**複数の参加者の投稿を読んで、与えられた立場に立って、適切な理由を書いて伝える**問題

通過率

問題a10 **47.8%**

問題β10 **48.9%**

※ a・β共通問題。aとβは調査を受けた生徒が異なる。



これまで**学習した文法事項のレポートリー**から、伝えたい内容に最適なものを用いて英文を正確に書くことに課題



日常的な話題について、**基本的な語句や文を用いて、自身の考えを読み手の状況に合わせて書く**ことに課題
(理由が場面や状況に即して論理的に適切な内容となっていない)



社会的な話題について**読んだことをもとに、自分の意見を具体例等とともに書く**ことに課題

パフォーマンステスト「話すこと」「書くこと」の両方を実施している割合は、 いずれの科目においても55%に満たない

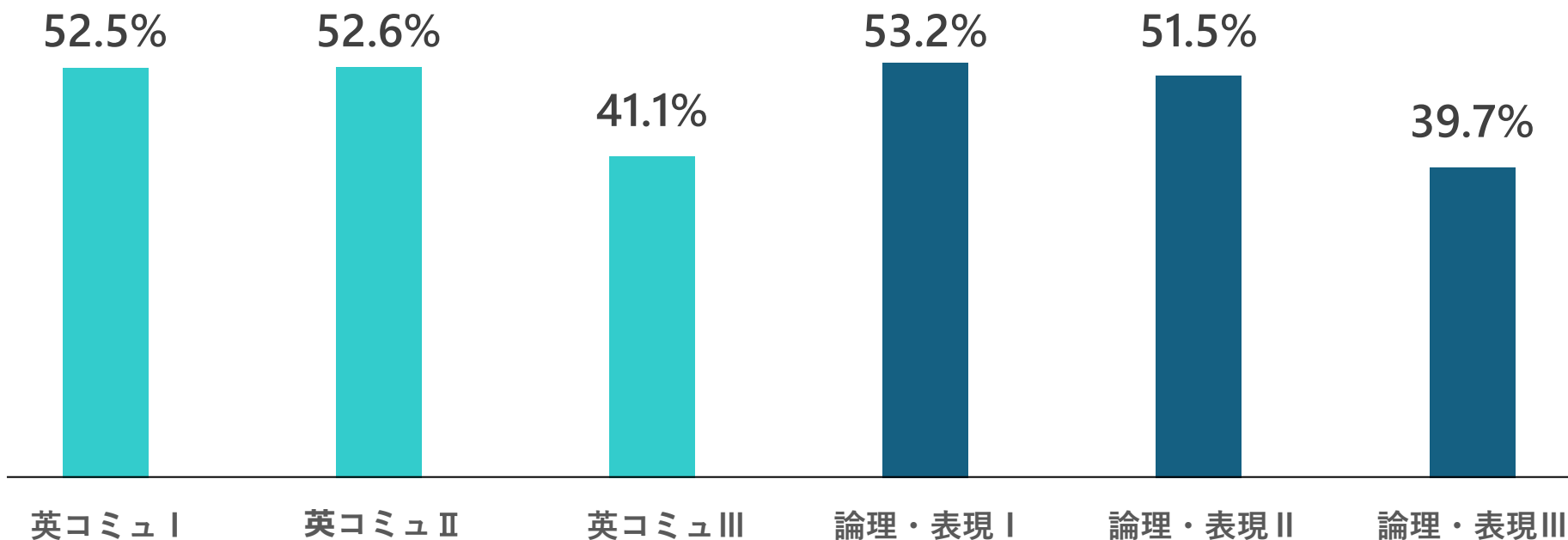
【普通科＋その他の専門学科及び総合学科】

英語コミュニケーション

5領域を総合的に扱う科目群

論理・表現

ディベートやディスカッション等を通して
発信力を高める科目群



※調査対象は公立高等学校及び中等教育学校の後期課程（特別支援学校、定時制及び通信制の課程は対象外。）

※調査基準日は令和6年12月1日現在

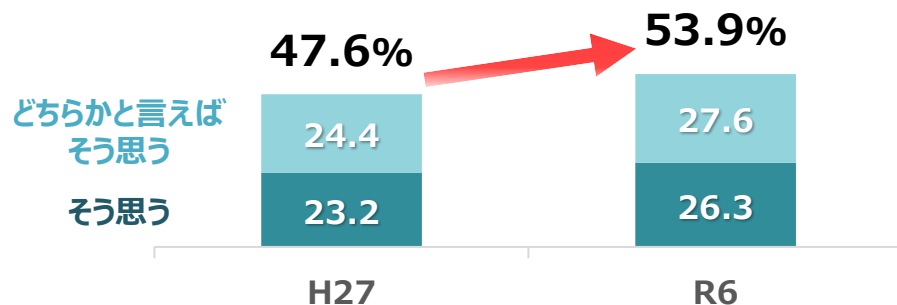
※学科単位で回答。「普通科」「その他の専門学科及び総合学科」について、それぞれ複数の学科が設置されている場合は、その学校に設置されている「普通科」「その他の専門学科及び総合学科」ごとに1つつ回答として集計している。

※「英コミュⅠ」は「英語コミュニケーションⅠ」、「英コミュⅡ」は「英語コミュニケーションⅡ」、「英コミュⅢ」は「英語コミュニケーションⅢ」を示している。

（出典）令和6年度英語教育実施状況調査より作成。

英語学習に対する意識

- 英語の学習が好きだ

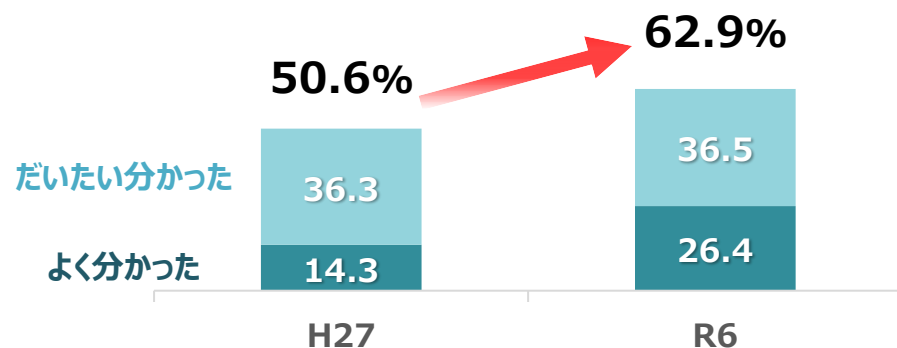


「英語の学習が好きだ」という質問に対する
肯定的な回答は、
前回調査から**6.3ポイント上昇**

授業の理解度

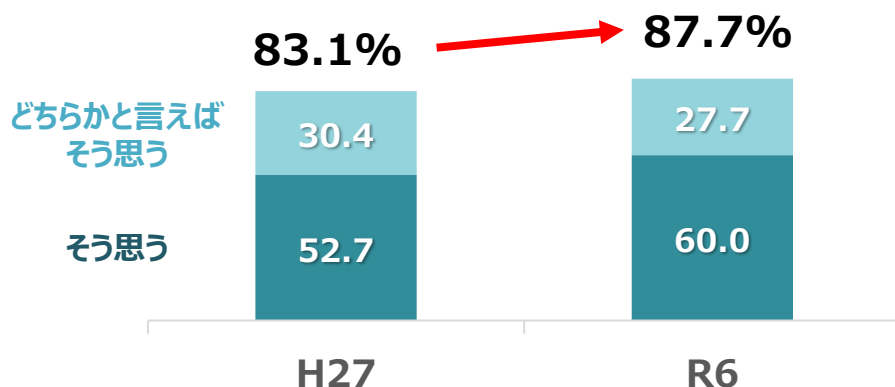
- 「英語コミュニケーションⅠ」の授業がどの程度分かりましたか

※H27は「コミュニケーション英語Ⅰ」



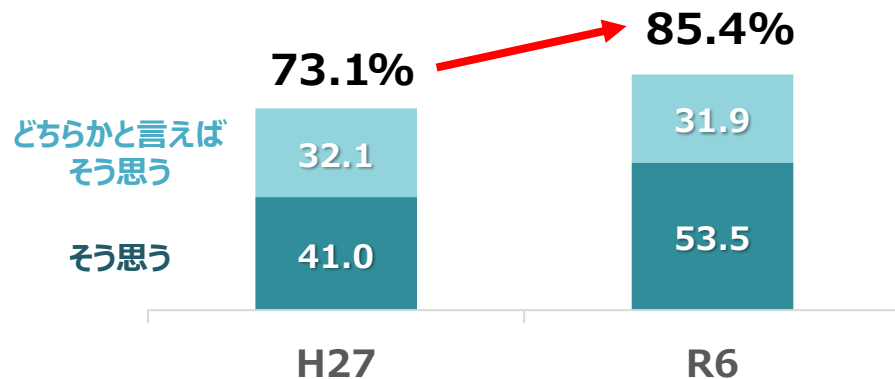
「『英語コミュニケーションⅠ』の授業がどの
程度分かりましたか」という質問に対する
肯定的な回答は、
前回調査から**12.3ポイント上昇**

英語の学習は大切だ



「英語の学習は大切だ」という質問に対する
肯定的な回答は、
前回調査から**4.6ポイント上回る**

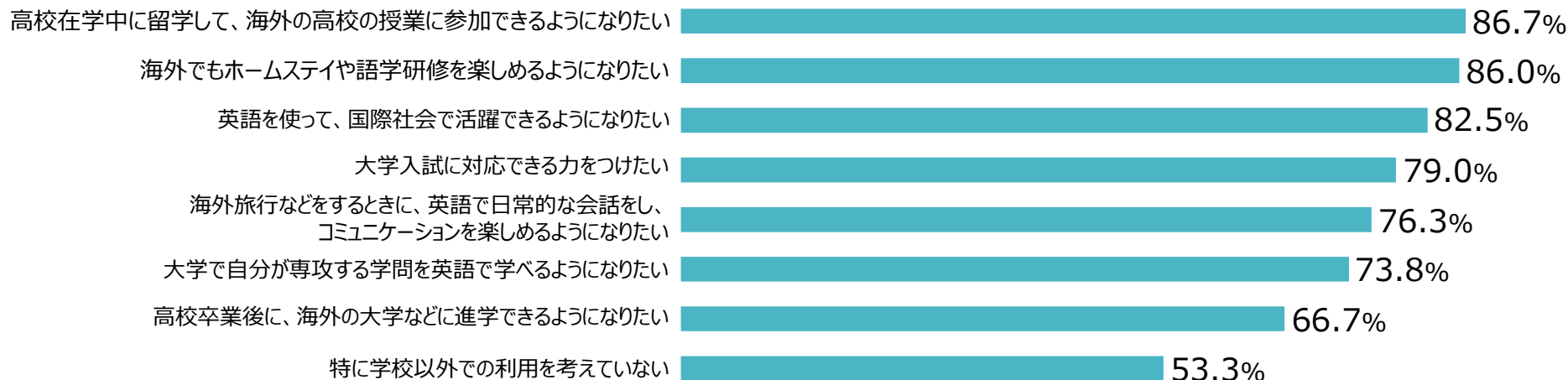
英語を学習すれば、ふだんの生活や社会に出て役立つ



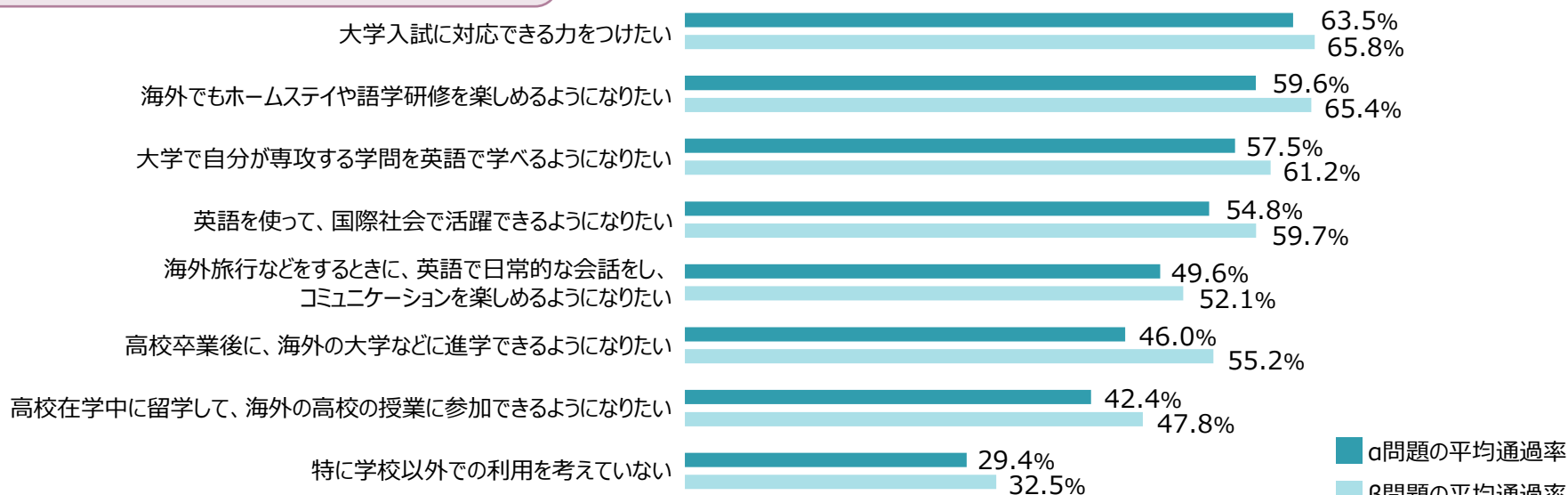
「英語を学習すれば、ふだんの生活や社会に
出て役立つ」という質問に対する
肯定的な回答は、
前回調査から**12.3ポイント上回る**

どの程度まで英語を身につけたいと思っていますか

回答別平均通過率（実技調査問題）



回答別平均通過率（ペーパーテスト調査問題）



※実技調査問題の回答数は204人、ペーパーテスト調査問題の回答数は8,703人。最も当てはまる選択肢を一つ選ぶ形式。

（出典）令和6年度高等学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問調査

英語を身につけたい程度は「日常的な会話を楽しめるくらい」が最多

Q 現在、英語をどの程度まで身につけたいと思っていますか

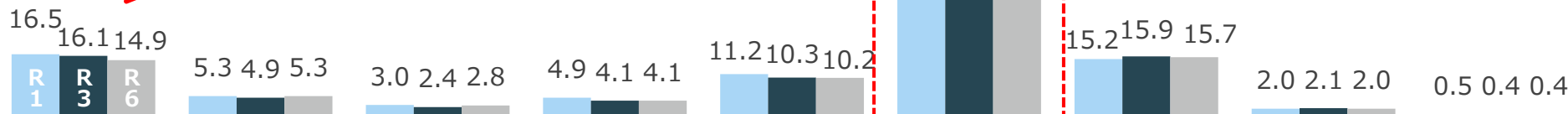
文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

(%)

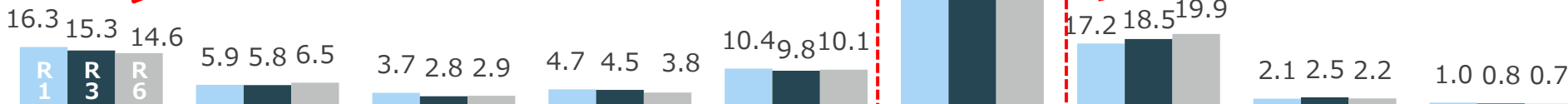
高1



高2



高3



どの学年も割合が高い

※最も近いものを次のうちから1つ選ぶ形式。

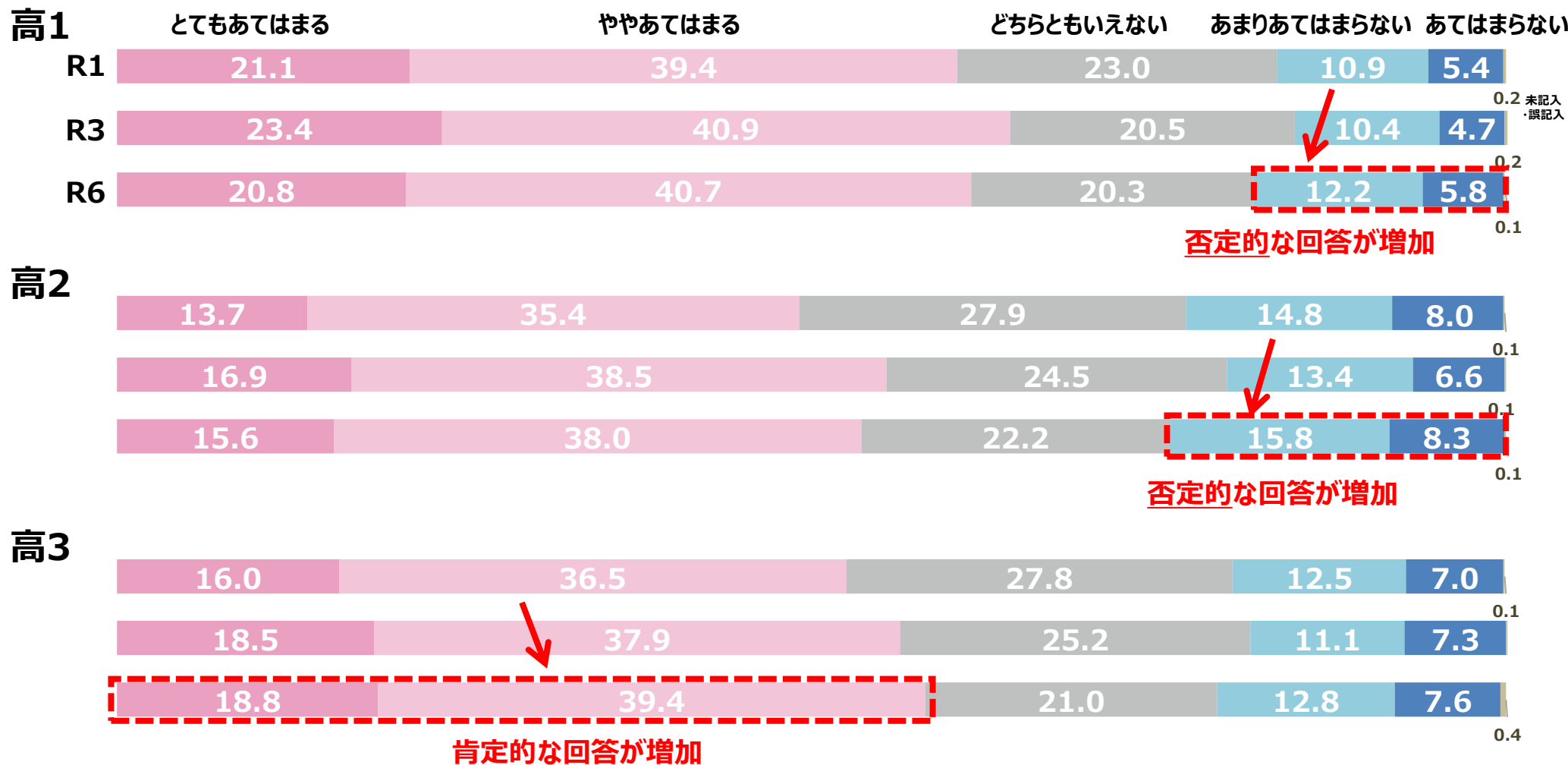
(出典) 令和7年度英語教育に関する調査研究 (英語力に関する調査分析)

- 高1・2では「目標や目的をもって授業に取り組むようにしている」に否定的な回答はR1→R6で増加
- 一方、高3では肯定的な回答が増加

Q 目標や目的をもって授業に取り組むようにしている

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

(%)



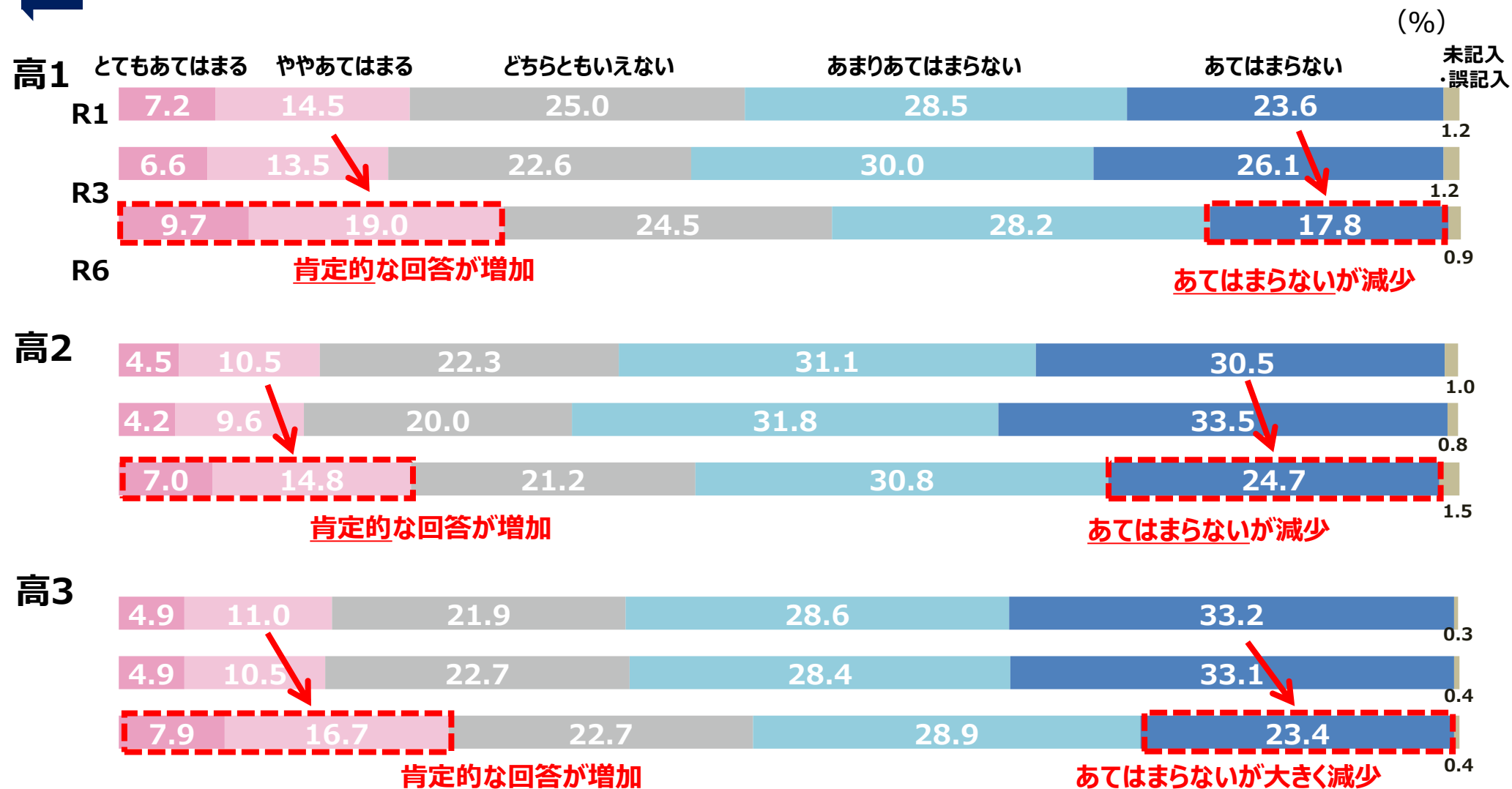
※最も近いものを次のうちから1つ選ぶ形式。

(出典) 令和7年度英語教育に関する調査研究（英語力に関する調査分析）

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

Q

ネイティブの先生に英語で話しかけるなど、積極的に英語を話すようにしている



※最も近いものを次のうちから1つ選ぶ形式。

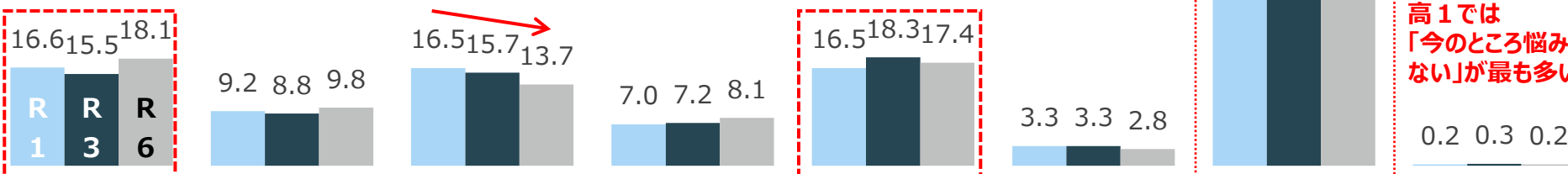
（出典）令和7年度英語教育に関する調査研究（英語力に関する調査分析）

- 高2・3では「計画を実行できない、または長続きしない」に悩んでいる割合が最多
- どの学年も「学習の方法がわからない」割合が一定存在

Q 英語について、学習するうえで、悩んでいることは何ですか

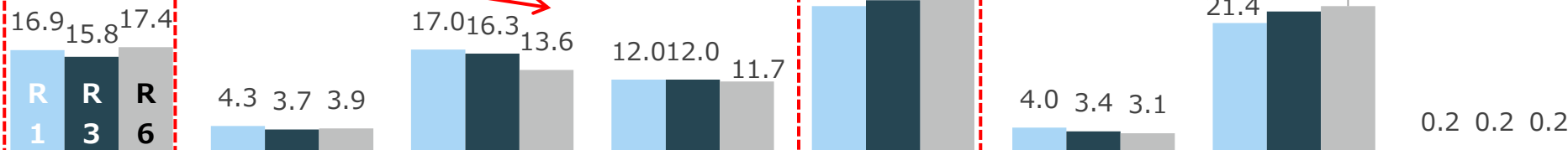
文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

高1



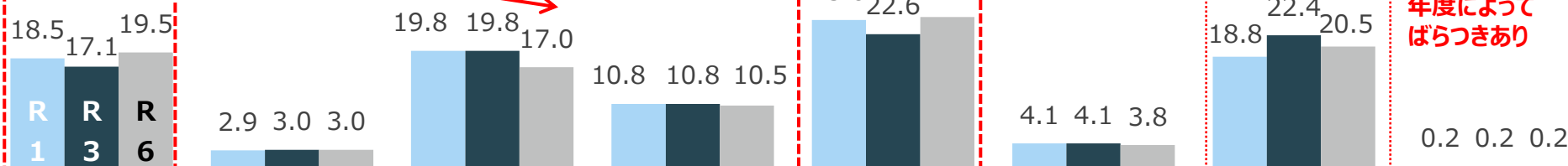
高1では「今のところ悩みはない」が最も多い

高2



年度によってばらつきあり

高3



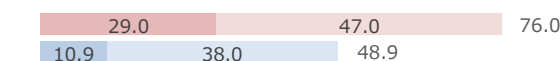
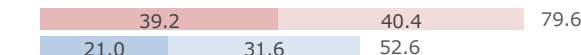
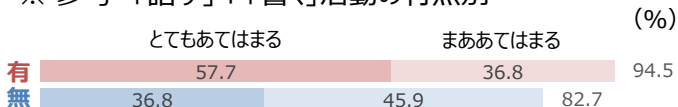
どの学年も一定割合存在

どの学年も一定割合存在
高2・3では最も多い

英語を使う力を高める学習方法がわからない高3生が6割

英語や英語学習に関することについて教えてください

※ 参考 「話す」+「書く」活動の有無別



「話す」、「書く」活動の有無で差はない

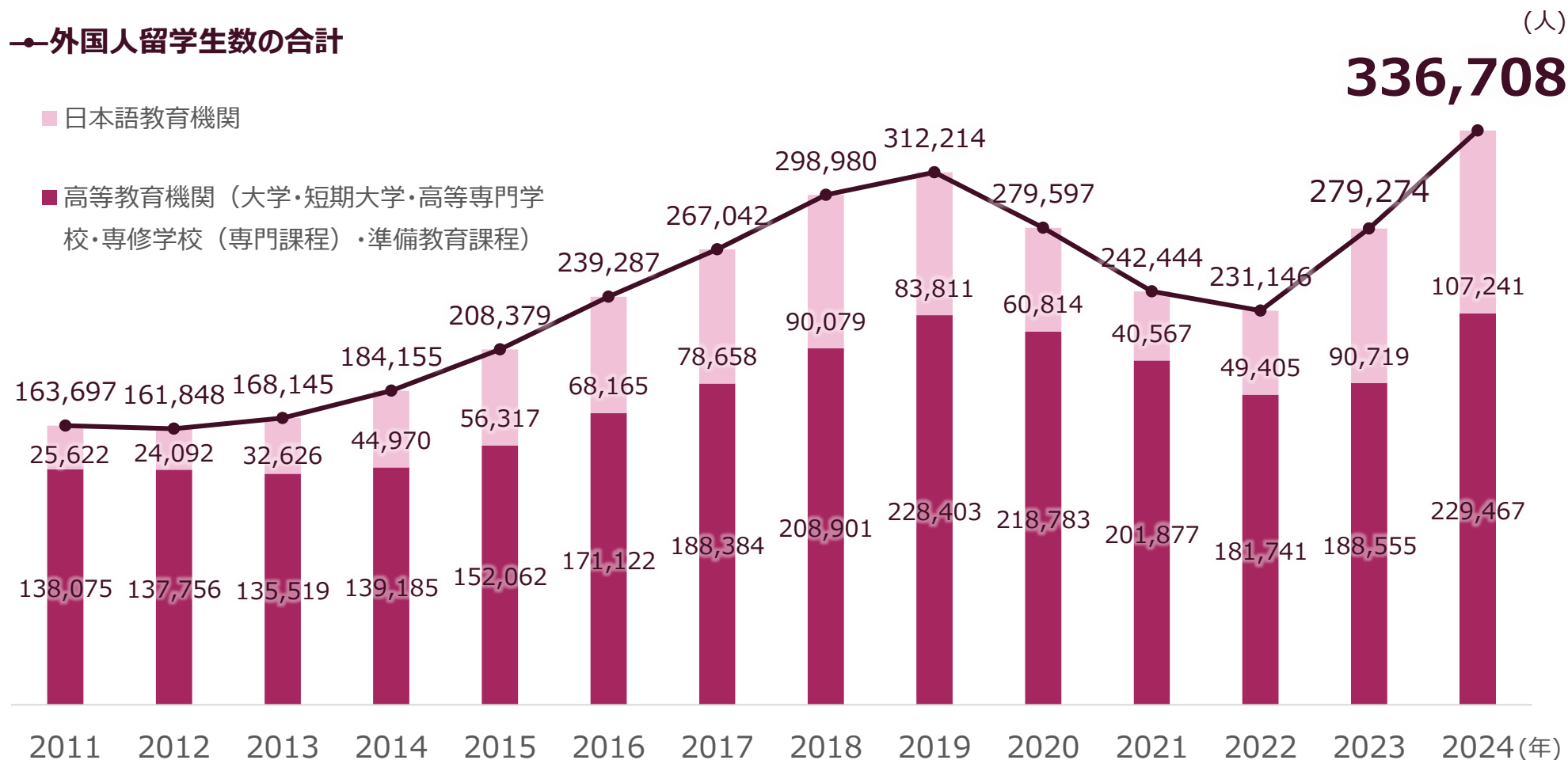
※高3生に対して2021年3～4月に実施。

※「英語がわかったり通じたりするとうれしい」「教室の外で英語を使ってみたい」の項目は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。それ以外の項目は、「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

※授業で「話す」「書く」活動についてどちらも「していた（よく+ときどき）」と回答した群（421名）を「話す」+「書く」活動をしていた群、どちらも「していなかった（あまり+まったく）」と回答した（405名）群を「話す」+「書く」活動をしていなかった群としている。

日本の大学等に在籍する外国人留学生数は過去最多

外国人留学生数の合計



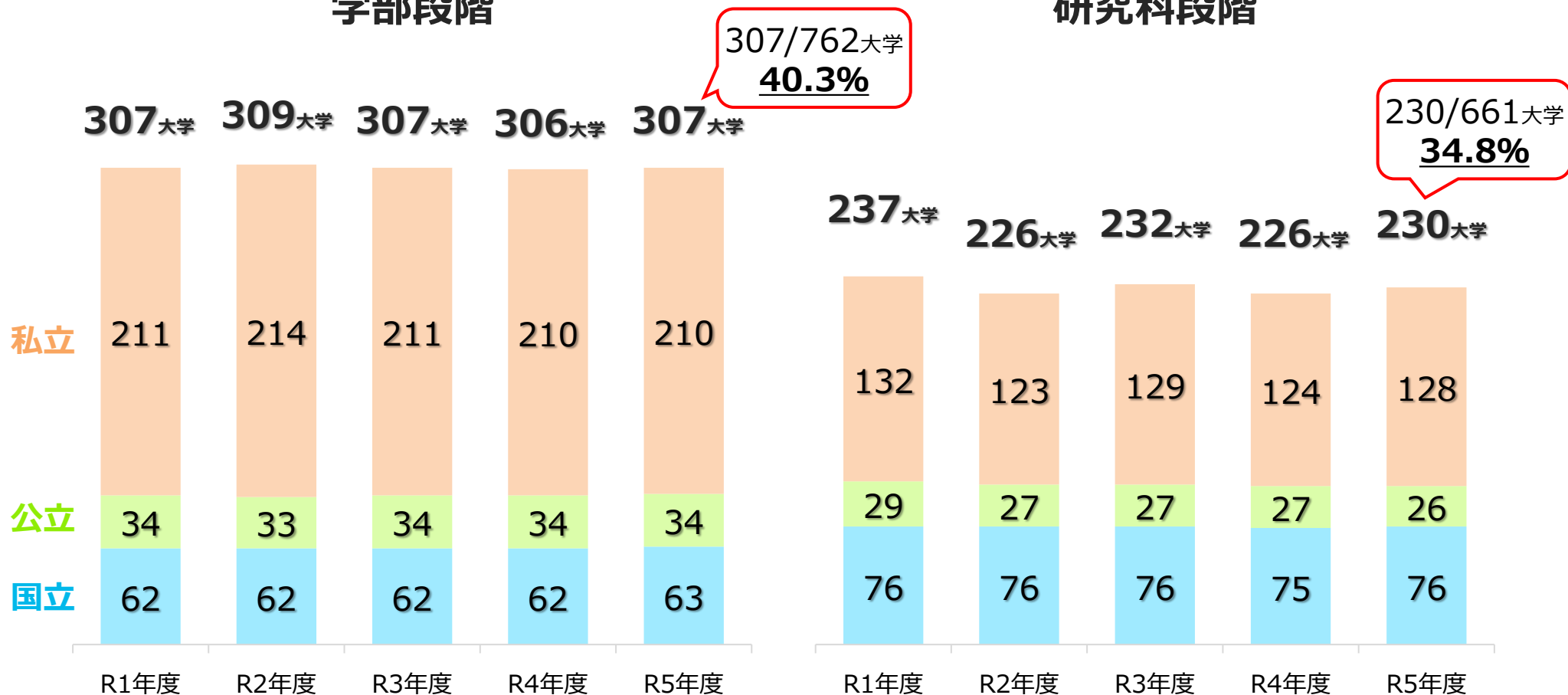
※ 本調査の対象は、各年5月1日時点において、在留資格「留学」により、我が国の大学（大学院を含む。）、短期大学、高等専門学校、専修学校（専門課程）、我が国の大学に入学するための準備教育課程を設置する教育施設及び日本語教育機関に在籍している外国人学生を外国人留学生という。

（出典）独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）「外国人留学生在籍状況調査」を基に作成。

外国語のみの授業を実施している日本の高等教育機関は約 4 割

学部段階

研究科段階



※ 令和5年度の調査対象は792大学。（令和5年度学校基本調査のデータにある810大学のうち、短期大学、専門職大学、専門職短期大学、令和5年度に学生の募集を停止した大学を除いた大学数。回答率は99%（786大学が回答。うち、各母数は【学部段階】762大学、【研究科段階】661大学。）

※ 令和元年度から令和4年度における本調査の回答数は、【令和4年度】781大学、【令和3年度】775大学、【令和2年度】775大学、【令和元年度】763大学。

※ 外国語のみの授業（日本語を併用しない授業）の実施について、選択肢「ある」と回答した学部が1つ以上ある大学を集計。

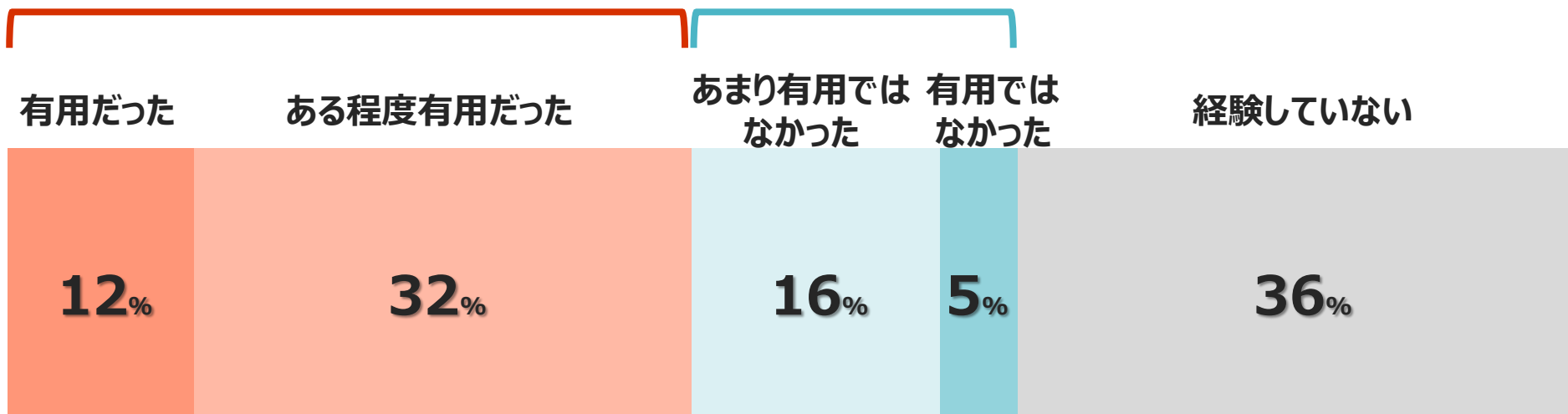
※ 学部段階の大学数について、大学院のみを設置する大学は母数に含めない。

※ 令和5年度は「外国語による授業」を実施している大学、令和4年度は「英語等による授業」を実施している大学、令和元年度から令和3年度は「英語による授業」を実施している大学の数。

- 主に英語で行われる授業の履修経験は6割以上
- うち約7割が有用性に肯定的な回答

Q

大学在学中に経験した「主に英語で行われる授業の履修（語学科目除く）」はどの程度有用だったと感じますか

授業の履修経験は6割以上履修経験のある学生の約7割が
有用性に肯定的な回答

※回答の割合は、小数点第三位で四捨五入した上でパーセント表示している。

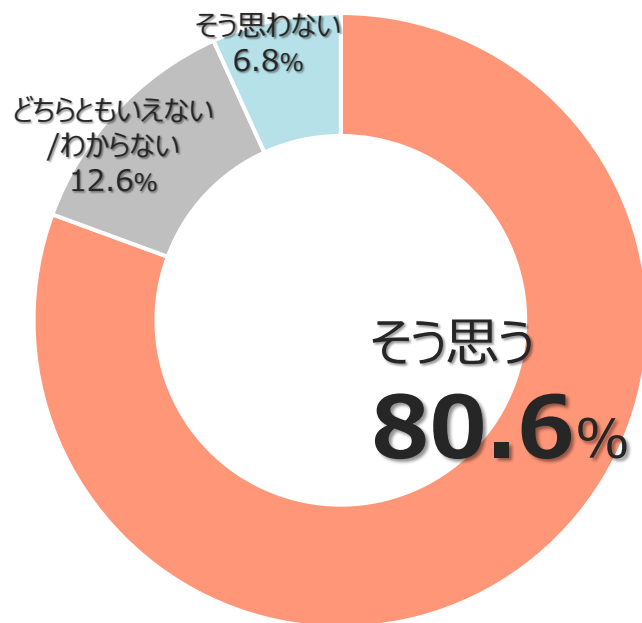
(出典) 令和6年度「全国学生調査（第4回試行実施）」

約 8 割の企業が、

「社員の英語によるコミュニケーション能力の強化は、企業価値を増大させるうえで望ましい」
「英語によるコミュニケーション能力を持つ人材の重要性が10年後に高まっている」と回答

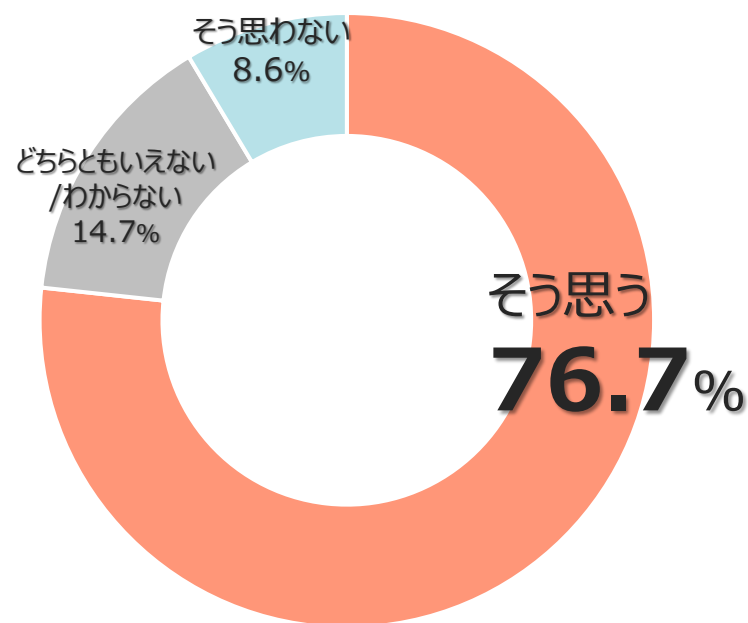
Q

社員の英語によるコミュニケーション能力の強化は、
企業価値を増大させる上で望ましいと考えますか？



Q

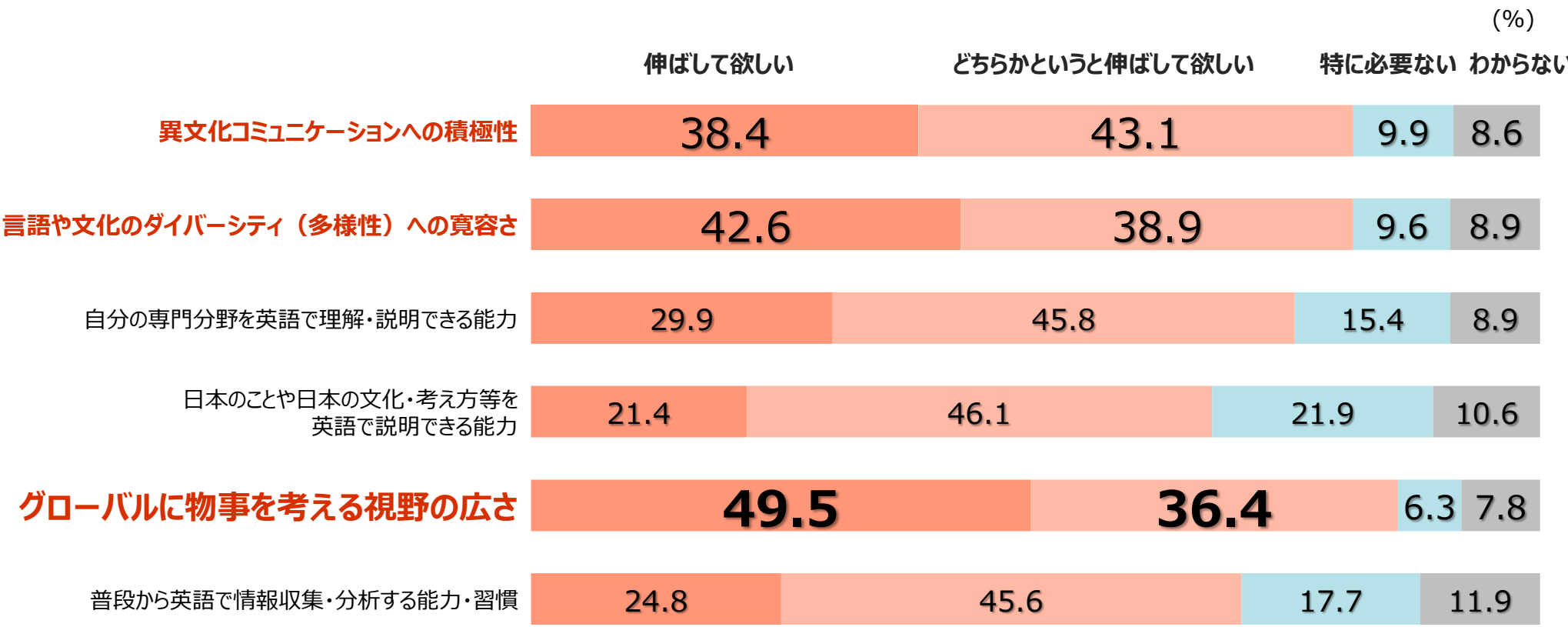
英語によるコミュニケーション能力を持つ人材の重要性は、
10年後に高まっていると考えますか？



※選択肢は、とてもそう思う／ややそう思う／どちらともいえない・わからない／あまりそう思わない／まったくそう思わないの5つ。
とてもそう思う／ややそう思うを「そう思う」にまとめ、あまりそう思わない／まったくそう思わないを「そう思わない」にまとめている。

- 企業が入社を志望する学生に伸ばして欲しい資質・能力等は、「グローバルに物事を考える視野の広さ」が最多（85.9%）
- 「異文化コミュニケーションへの積極性」、「言語や文化のダイバーシティ（多様性）への寛容さ」も8割超

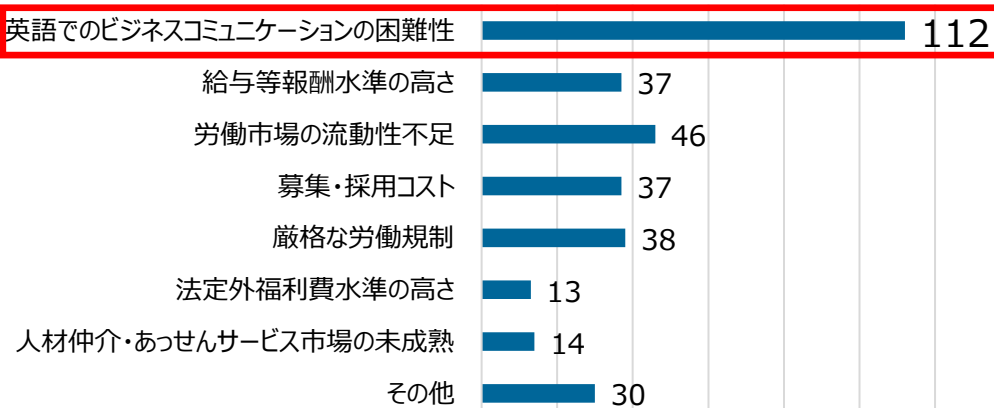
Q 貴社への入社を志望する学生に対して、英語力を伸ばす過程で併せて伸ばして欲しい資質・能力等は何ですか？



企業がグローバル日本人人材を確保する上での阻害要因は英語が上位

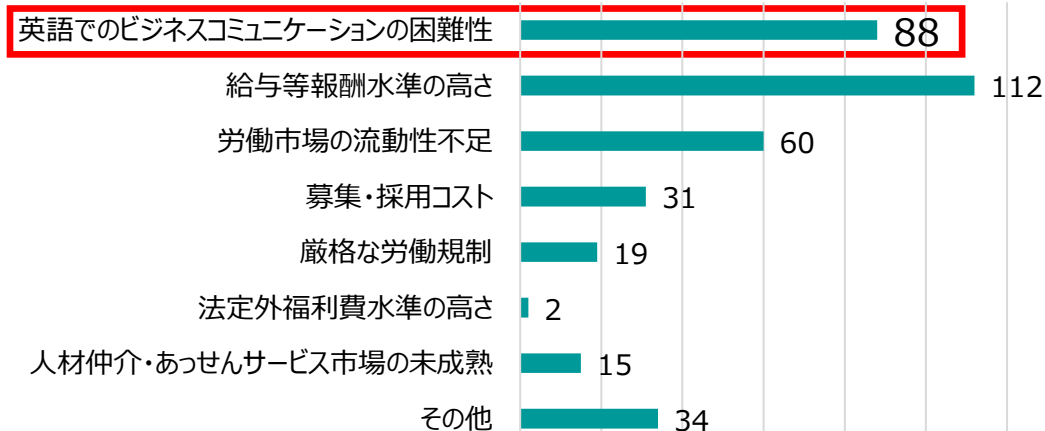
外国企業

回答企業数：141 社（1 つ以上回答した企業）



日本企業

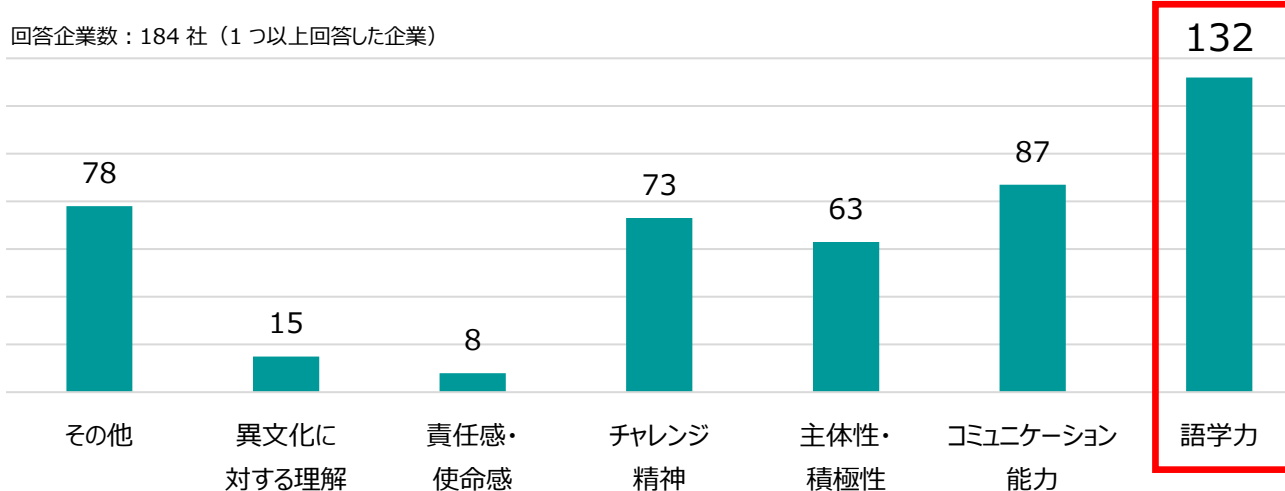
回答企業数：178 社（1 つ以上回答した企業）



日本人人材のグローバル化の課題

日本企業

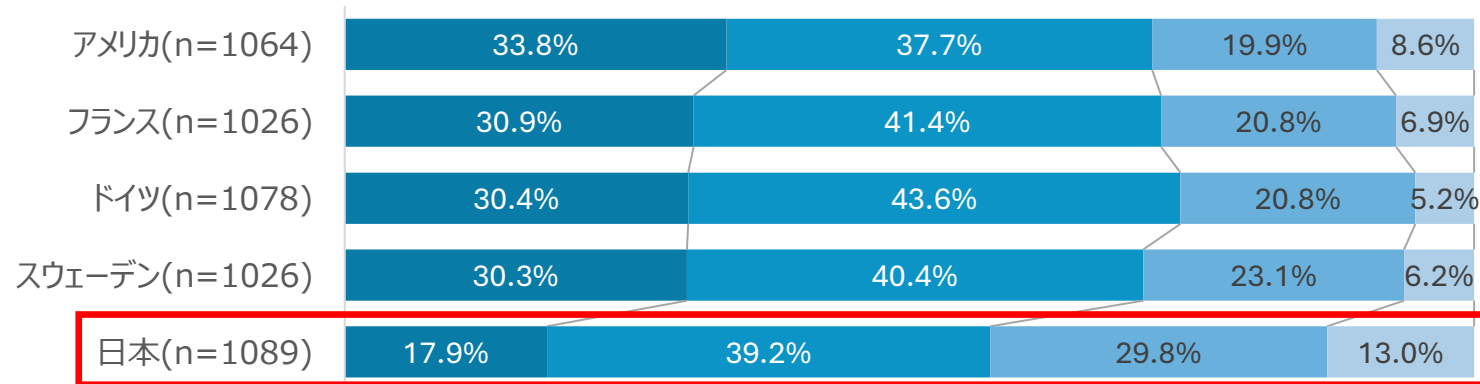
回答企業数：184 社（1 つ以上回答した企業）



日本の若者は諸外国に比べて発信力に課題

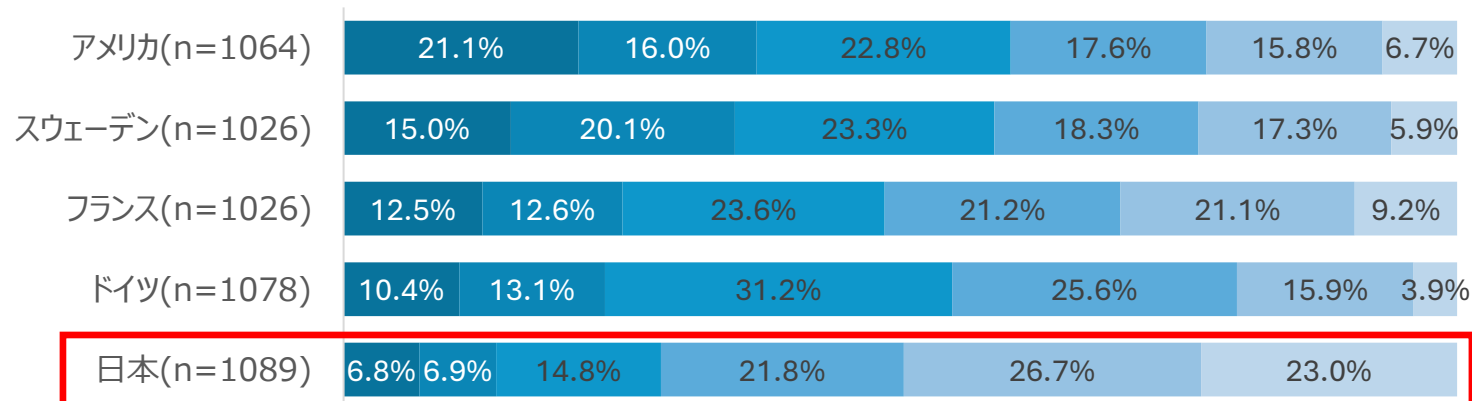
自分の考えをはっきり相手に伝えることができる

■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない



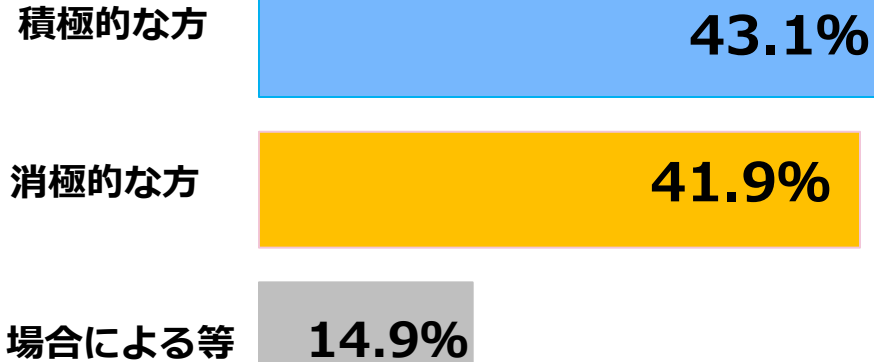
自信をもって自分のアイデアや意見を考えたり、話したりした

■ ほぼ毎日 ■ 週に4～5回 ■ 週に2～3回 ■ およそ週に1回 ■ 一度か二度 ■ 一度もない

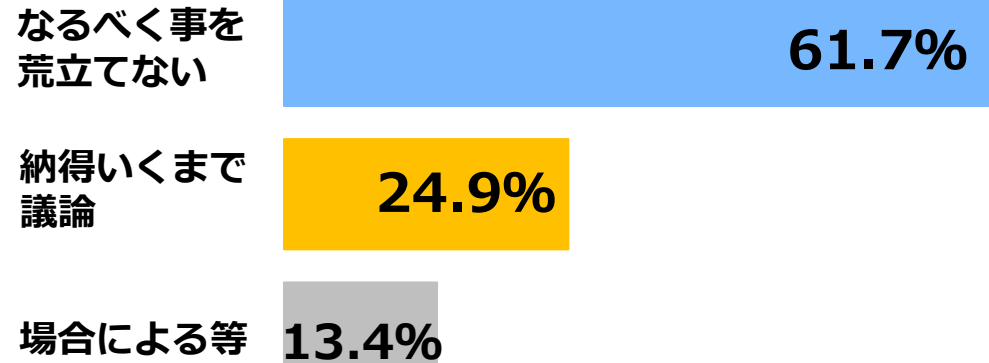


意見を主張することに消極的

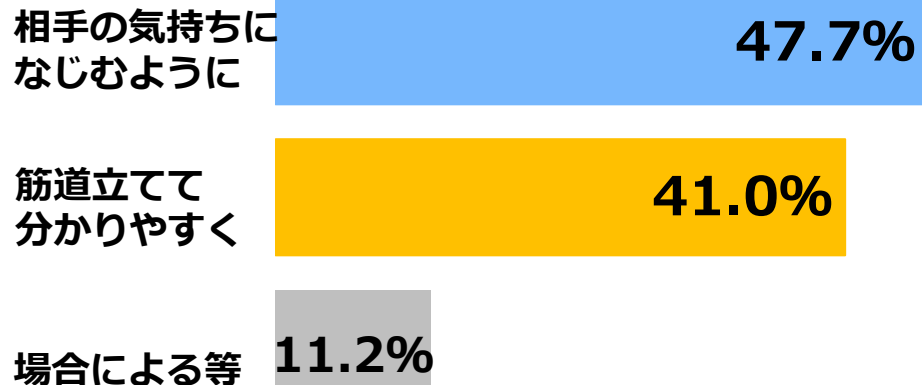
自分の考えや意見を表現すること



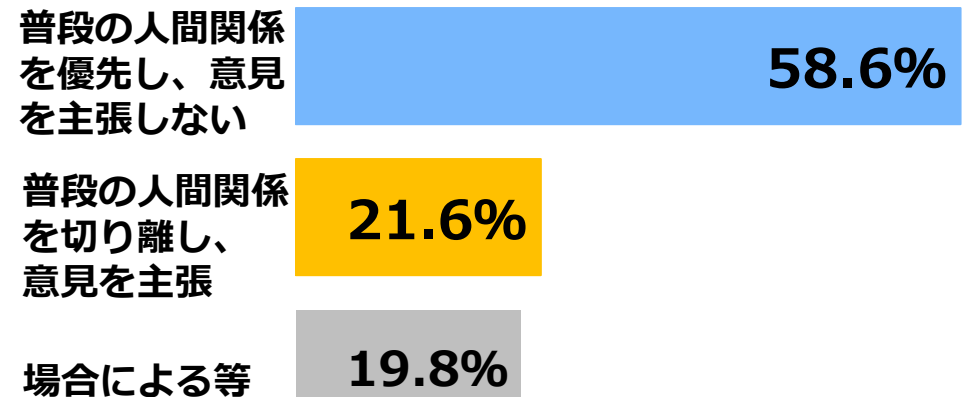
人と意見が食い違ったとき



人に話をするとき



友人や同僚などと意見交換するとき



「自分の考え」を書くことが苦手

全国学力・学習状況調査では、自分の考えをまとめたり書いたりする問題の正答率に課題が見られる

小6・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無解答率
「ごみ拾い」か「花植え」かのどちらかを選んで、 でどのように話すかを書く（R4）	互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、 自分の考え をまとめる	47.8%	3.0%
【川村さんの文章】の空欄に学校の米作りの問題点と解決方法を書く（R5）	図表やグラフなどを用いて、 自分の考え が伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる	26.8%	7.0%
資料を読み、運動と食事の両方について分かったことをもとに、自分ができそうなことをまとめて書く（R5）	文章を読んで理解したことに基づいて、 自分の考え をまとめることができるかどうかをみる	56.4%	8.4%

中3・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無解答率
参加者の誰がどのようなことについて発言するとよいかと、そのように 考えた理由 を書く（R3）	話合いの話題や方向を捉えて、 話す内容を考える	57.5%	3.3%
農林水産省のウェブページにある資料の一部から必要な情報を引用し、意見文の下書きにスマート農業の効果を書き加える（R4）	自分の考え が伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く	46.5%	8.8%